

マゾヒスティック・エクスタシー 1

橘ぱん

 OVERLAP





恋愛って知ってるか？

広辞苑によると、

——男女が互いに相手をこいしたうこと。また、その感情。こい。らしい。

まあ要するに、好きな女の子から好かれるってことだ。つまり相思相愛。憧れるだろ？

女の子と相思相愛。憧れのあの子が、俺のことを好きになってくれる、好きだ！憧れないわけがない。

夢見ないわけがない。

だって好きな子相手なら、アレやソレや、そしてナニをしたって怒られない。

そうともっ。健全な男子高校生として、是が非でも高校卒業時には卒業しておきたいじゃないか。

え、ナニから卒業？

そりゃナニさ。

俺の凸を、女の子の凹にパイルダーオンすることだ、うん。

もちろん、俺はこう見えても真面目で純情派だ。

卒業時の凹はもちろん、愛している彼女のものであるべきだと思う。そこらの誰でもいいとか、そういうふざけた思考は持っていない。

愛している彼女と共に卒業をして、大人の階段を上り、そのまま——つとラブラブイチャイチャして、社会に出たら結婚して、子供を二人くらい作って、マイホームを持ち、幸せな家庭を築く。

それが俺の人生のグランドデザインってヤツだ。

うん、そうなんだ。そのためには、もう分かっていると思うけど、彼女が必要だ。相思相愛になることが必要なわけだ。

ちなみに俺は、モテようと思えばすぐにモテることが出来る。

あ、ちょっと待ってくれ。怒ったか？ 怒っただろ。

違うんだ。傲慢なんてする気じゃない。そうじゃない。

どれだけモテようが俺は——相思相愛にはなれないんだっ。

モテるけど。でもキスもナニも出来ない、するわけにはいかないんだ。

もしそんなことをすれば……それはそれは、恐ろしい結果が待っている。

これ、むしろ地獄だろ。だったらまだ、モテない方がましだ！

そうともこれは呪い、俺——千種光平に掛けられた本物の呪いだっ。

## 第〇章

## 金色の痴女

塗り立てでまだ乾いていない青い絵の具が、空一面に広がっていた。今にも滴り落ちてきそうな、濃密な青だ。

その湿気に抗うように、太陽がギラギラと闘っている。

もっともその努力は、ただでさえ高い湿気に暑さという、堪らない不快感を与える効果しかもたらしていない。

「東京より暑いぞ……。こんなに暑かったっけ」

ここは狐尾市、東京から電車で二時間ほどの盆地に広がるそこそこ栄えている地方都市だ。標高こそ高いものの、山に囲まれた盆地なせいで熱気が籠もってとても暑い。

この街に今日着いたばかりの俺には、この暑さはかなりキツイ。

「あちい……」

参道の階段を上り切り、滝のように流れ出る汗をタオルで拭った。

一度、大きく深呼吸をしてから顔を上げる。ちらほらと緑色——雑草が点在する、手入れの行き届いていない境内が目に見え込んできた。

その先にあるのは古ぼけた社だ。

薄ぼんやりとだけど、俺にはその社に見覚えがあった。何しろ小さい頃に、よく遊んだ場所なのだ。が、記憶の中よりも遙かにボロくなっている。

一对で鎮座している狐の置物は苔むして、掃除の痕跡などなく無数の鳥の糞が掛かったままだ。屋根には雑草が生え放題で、中央にぶら下がった鈴は今にも落ちそう。そして神社の生命線である賽銭箱は、お金よりも埃と落ち葉が確実に溜まっている感じ。

十数年、誰の手も入っていないこと間違いなしだ。

ただ、今にも朽ち果てそうなくらいオンボロになっている神社のくせに、由緒は正しく、大妖怪玉芽御前が封じられていると伝えられ、その名も玉芽神社という。

御利益は『意中の人をモテさせること』。

恋人に浮気して欲しいマゾ以外は、普通来ないこと請け合いだ。

——廃れて当然だった。

そんなことを思いつつ俺は、静まりかえった境内を進んだ。

「ここに呪いを解くヒントがあるって本当かよ。お袋、嘘吐いたんじゃないだろうな」  
今、ここに人が居れば世界ランクの『がっかりな顔』を見ることが出来ただろう。

とりあえず日本人の義務感か、誰が回収するとも知れない賽銭箱の前に立って、財布の中から小銭を——百円——いや十円——いやいや一円で十分だろう——を投げ入れる。

二回拝礼をして、二回柏手を打ち、最後にもう一回拝礼をする。

巫女さん出身のお袋に叩き込まれた、正規の参拜方法だ。

「どうか、俺の呪いが解けますように」

「円程度の期待感で、俺は祈った。その瞬間だ。」

「十珂光基おとおおおとおおっ！」

鼓膜と魂を突き破るような奇声が、俺を貫いた。

キ——ンと耳鳴りがして、体が硬直してしまう。

「光基っ、光基っ、みっつもっとおおおとおおおとおおおとおおお！」

どこから出てきたのか、目の前にお姉さんの姿が突如として現れた。しかも、猛然と突進してくる。

「おおっ、やっぱり光基じゃっ。妾の下に来たのじゃな！」

歓喜の叫び、いや雄叫びを上げながらだ。

喜ぶのはいいのだけど、その光基って誰だよっ。完全に人違いだ。

「いや、俺は光基じゃなくて——」

「愛の勝利なのじゃ——！！」

俺の話なんて聞く気の欠片もなく、真正面から俺の胸に飛び込んでフニユツと抱きついてくる。

フニユツ？

お姉さんの両腕が、俺の背中に回ってがっしりホールドしてきたのだ。



そして、フニユツだ。  
何かとても柔らかいものが、俺の胸に押しつけられている。  
恐る恐る、俺は視線を下に落とした。  
白い、白い、とっても白い二つのプリンが、俺の胸に押しつけられて柔らかく歪んでい  
る。

「ば、ばいばい……」

「ん？ おお、そうじゃぞ。お主が大好きであった乳房じゃー！」

お姉さんが何を勘違いしたのか、嬉しそうに言うのと更にグリグリと押しつけてくる。

そう、おっぱいをだ。

柔らかいし、温かい。

暑い、とても暑いのに、何故だろう。女の子の体温は、いつだって甘いぬくもりだ。

「って、そうじゃなくてっ！ お姉さん、ダメだって。我慢出来なくなるから！」

「む？ 我慢なんぞする必要ないのじゃぞ。それになんじゃ、他人行儀な。お姉さんでは  
なく、玉芽と呼ぶがよい」

「知らないしっ、ええと、玉芽さん？」

「玉芽じゃっ。た・ま・め・じゃ♥」

更にぐりぐりとおっぱいを押しつけてくる。

「ダメっ、ホントもう、こ、これ以上はっ、俺、お姉さん——あ、いや、玉芽をアクメさ

せちやう！」

慌てて俺は玉芽を突き飛ばした。乱暴だけど仕方ない。俺の呪いに、どこの誰だか知ら  
ないが玉芽を巻き込むわけにはいかないっ。

「何をするのじゃ——ぎゃん!?」

喋りながらものの見事に尻餅をついて、そのまま賽銭箱に後頭部を打ち付けた。

見るだけで痛そうだ。

後頭部を抱えて悶絶している。

が、俺の興味は即座に違う方向に飛んでしまった。

玉芽、頭に耳が生えています。

いや、耳なんて誰の頭にもある。でも、この人の耳は左右に小さくではなく、ぴよこん  
と猫、いや狐のような感じで生えているのだ。

つまり、ケモノミミ。

そう思っただけ見れば、髪の毛は金色で狐みたいな色だ。

服装は、派手、いやケバクカスタマイズされた巫女服で、胸元はぼーんと開いて、袴  
も大胆としか言いようがない程に布地がカットされている。

その証拠に痛打した後頭部を抱えた玉芽は、脚をM字に開脚していて……中身が一切隠  
れることなくモロ出しになってしまっている。

ちなみに玉芽の凹を隠す布は、どう見てもパンツではなくフンドシだ。

思わずその神秘の凹を凝視しかけて、俺は慌てて咳払いをして視線を外した。見たい。とんでもなく見たいけど、我慢しなければならぬ。

「コホン。平気ですか？」

「いつつ、慌てすぎじゃぞ。折角、妾の下に帰ってきたと言うのに、いきなり押し倒すことはあるまい」

後頭部をさすりながら、玉芽が涙目を向けてくる。

「いや、押し倒すって……」

「む、なんじゃ照れておるのか？」

横を向いたままの俺に、玉芽が首を傾げる。そんな彼女の股を、俺は指差した。何しろこの人、全く隠そうとしないのだ。

「いや照れもするでしょっ。股が、フンドシがモロ見えですって！」

「ふむ。おかしなヤツじゃな」

何がおかしいのかさっぱりだが、玉芽が自分の袴の裾をヒラヒラと動かして、更にフンドシをモロ見えにする。

分かった。この玉芽ってお姉さん、さては痴女だな！

「お主が妾を受け入れた以上、この体はお主のものじゃろう？ 何を照れる必要がある」

「は？」

「は？ ではない。こうやって妾の下に来たのが、何よりの証拠であろうが。妾の愛を、

お主は受け入れたのであろう？」

「いや、何を言ってるのか……」

「ほれほれ、妾の乳房を好きになだけ揉んで、乳頭を吸うがよい」

「にゅ、にゅうとう？ グラニュー糖か何かで？」

「ふむ。水蜜桃の様に甘いのは否定はせんが……」

お姉さんが立ち上がり、辛うじて胸を隠している布に手を掛け——ぺろん。

「ほれ、この桜色の突起のことじゃ」

「ぎゃ——！」

白く柔らかそうな丘の中心に、ピンクの突起物があります。

俺、保健体育で習いました。これ、乳首って言います。

「なんでお主が悲鳴を上げるのじゃ——」

「どこの誰だっ、いきなり乳首見せられたら悲鳴を上げるわい！」

「嬉しくせに。見たいくせに」

「そうだけど、そうだけどっ、お、男の子の半分は純情で出来てるんです！」

「み、光基の分際によく言うわっ。ほれほれ、触ってみるがよい。吸うてみるがよい。甘露じゃぞ？」

玉芽がモロだしおっぱいをフルフルと揺らせてくる。

「ぐ、ぐぐぐぐぐ……」

鋼の精神力で必死に抑えていたものが、魂の奥底から盛り上がってくる。ダメだダメだと思っただけでも、男の本能が——抑えきれない。

だって乳首ですよ？ ツ……ツンツンしてみたい。人差し指で、左右同時に、指先でツンツンって押してみたいだろうが！

「ぬ、どうしたのじゃ？」

小首を傾げた玉芽のおっぱいが、乳首が、プルンと揺れるのが視界の端に入ってしまった。

「おかしなヤツじゃな。ほれ、ちゃんと妾の顔を見ぬか」

「え、それ、それだけはダメだからっ！」

「ええ、ダメも何もないのじゃー！」

玉芽が強引に俺の手を振り払い、のぞき込んでくる。

目と目が、合う。

「ダ、ダメだ、お、俺もうっ、俺もう我慢の限界でええええええっ！」

魂がスパークする。

悶々とした俺の性欲が頭から立ち上り、虚空でまとまっていく。

そしてすぐに、一つの剣へと形を整える。

まっすぐに玉芽のおっぱいへと切っ先を向けた、それは剣だ。

柄はない。手で握る部分もほとんどなく、鉛色に輝く円柱状の刃を持たない刀身が五十

センチほど延びる。その延びた先端部分だけが金色に輝き、四つの刃を持つ四角錐となっていた。

何かを斬るとしたならば、この四角錐の部分以外は無理だろう。いや、斬るといふよりも刺突以外に武器としての使用用途は考えられない、実用には耐えかねる武器だ。

「ぬっ、《鬼神魂魄刀》じゃとっ！」

玉芽が驚きの声を上げた。と、同時に《鬼神魂魄刀》と呼ばれた剣が一直線に飛んでい

く。

「しまったっ！」

ずぶり——玉芽の体に、《鬼神魂魄刀》が挿入されていく。

「ふあっ、ふああああんっ、あ、熱いのじゃ……妾が抗いきれぬ力じゃとっ！」

《鬼神魂魄刀》が完全に玉芽の中に挿入されると共に、俺との間にジャラリと鎖が姿を現した。玉芽側から、猛スピードで光が鎖を伝って俺へと輝き迫る。

そして、俺の中に光が入り、爆ぜた。

「や、やばい……」

恐る恐る、玉芽を見る。

顔を下げたまま動かない。

いや、二秒ほどして玉芽が頭を軽く左右に、何かを振り払うように動かす。そしてゆっくりと顔を上げ、俺を見つめた。



その瞳には——分かる、俺には分かる——♥がはつきりと浮かんでいる！  
 「ああんもうっ、やっぱりなんて魅力的な男なのじゃっ。ほれほれ、我慢せずに、指先で妾の乳首をツンツンとするがよいぞ。なあに安心せい、妾もしっかり気持ちよくなるしな」

おっぱいを下から持ち上げ、玉芽がその先端の突起を主張してくる。

そう、俺の『ツンツンしたい』という欲望を、まんま叶えてあげると迫ってくるのだ。

「ほらほら光基お。妾の乳首をツンツンしたもれえ」

「いやあの、俺は光基って人じゃなくて、光平であって」

左掌で目を覆い、右手で迫ってくる玉芽を制止する。もつとも、左手の指の間から、チラチラとおっぱいを見てはしまうのだけど……仕方ない、男の子の半分は性的好奇心で出来ているのだ。

「光平？ 何を馬鹿なことを言っているのじゃ、背格好、顔、声、スケベさ、どこを取っても光基そのものじゃろうが」

「ご、ご先祖にそんな人が居たって聞いてるけど、俺は違うしっ」

「先祖？ む……ま、よく分からんが、構わん！」

ケラケラと玉芽が笑った。と思いきや、しつとりと潤んだ瞳を俺に向けてくる。

「構わんって別人だったら、大問題だろうが！」

「いいや、問題ないのじゃ。お主が誰であろうと、妾はお主を光基とした。光基と決めた

のじゃー！」

「んな無茶な！」

「とにかくじゃ、なんでもじゃ、今、妾は、お主に、乳首を——ツンツンして欲しいのじゃあ♥」

「え、遠慮します！」

ジリジリと俺は退く。

「遠慮は無用なのじゃっ！」

玉芽が跳んだ。両手を挙げ、俺に覆い被さってくる。完全に太陽を背にする恐るべき跳躍力で、慌てて数歩さがった程度では何の意味もない。ガバツと押し倒されてしまう。

意外にも力が強く、バタバタと暴れても抜け出すことが出来ない。

「くふふふ、良いぞ良いぞ。ようやくお主を組み伏せたのじゃ、少々は抵抗してもらわぬとお」

玉芽が舌なめずりをする。

「いや、それ普通は男の台詞だし！」

「ええい、何を古くさいっ」

いきなり玉芽に右手首を掴まれた。グイッとおっぱいへ引き寄せようとする。

「う、うわわわわわっ」

「ええ、お主も男じゃろう。おっぱいの一つや二つ、減るものもあるまい！」

「だからそれ、男の台詞だろ！」

「はっはっはっ、何を言うのじゃ。女は減らぬぞ？」

「へ？」

「ふっ、男は使うと精力が減って連戦は難しいのであろう？」

「アウト——！」

それは条件反射の突っ込みだった。自由な左手で思いつきり、とつても叩きやすそうに見えた——お尻を叩いた。

スッパ——ン。

乾いた、それはそれは綺麗な音が鳴り響く。

その瞬間だ。視界が真っ白になり、その輝く世界の中で玉芽が、何故か一糸まとわぬ姿で自分の体を抱きしめながら反り返っていく。

と同時に、意識が玉芽に引き寄せられていく……。



お尻から、まるで爆発するように妾を満たしていく。

なんじゃ、この痛覚——。

なんじゃ、この喜悅——。

分からね。痛いのに気持ちいいってどういうことじゃっ。

あ、ああああ、分かるぞっ。

いや、叩かれて強制的に分からされてしまうのじゃ。

そう！痛いから、気持ちいいのじゃ。

気持ちいいのは、痛みなのじゃ。

こんな、こんな刺激的な喜悅っ、妾、生まれて千二百三十四年っ、初めてなのじゃっ。

ああっ、もうダメじゃっ。

爆ぜるっ。気持ちいいで、全てが爆発して、達してしまうっ。

もう、妾がもうっ！

「も、もおおっ、りやめなのじゃあああああああああああああ！」



瞬間、意識が玉芽から離れて、俺のものになった。

目の前で玉芽が、顔を紅潮させ自分の体を強く抱きしめ、空に向かって叫んでいる。鎖や剣はもう見えない。ただ、玉芽の腰をくねらせる様子が、なんとというか、一言で表すとてもエッチだ。

「ハアツ……ハアハア……待てっ、待て待てっ、待つじゃ。落ち着くのじゃ！」

玉芽が、膝をガクガクと震わせながら俺を睨んだ。

「その、男子の本能丸出しの視線をよすのじゃっ」

玉芽が、いそいそと胸元をかき合わせ衣服の乱れを直す。しっかりとおっぱいが隠されてしまう。ちよっと残念……で、なくてっ。

「あ、ご、ごめんっ」

慌てて深呼吸だ。ゆっくりと息を吸い、息を吐く。と同時に、思いつき高まっていた興奮を必死に抑え込んでいく。

そうとも、玉芽の言う通りだ。俺は、女の子に興奮してはいけないのだ。

そんなことになれば――。

「ん？ 玉芽、なんともないのか？」

「ふむ。危うくお主の呪いで貞操を奪われるところであったが、ま、これまたお主のおかげで無事に呪いは収まったのじゃ」

ハアと玉芽がため息を吐いた。

いや、確かに呪いと言った。もしかして俺の呪いのことを知っているのか？

「ふむ。怪訝そうな顔じゃの」

腕を組み、背を反らせて自慢げに玉芽が頷いた。同時におっぱいがプルンと上下に弾む。

「妾は知っておるぞ。お主に呪いが掛かっていることをな」

「どこでそれを……」

「ふむ。お主が女子に性欲を抱いた状態で目と目が合うと、お主の煩惱の固まりである剣――《鬼神魂魄刀》が相手に突き刺さる。じゃろう？」

「あ、ああ」

「うむ。そして《鬼神魂魄刀》を刺された女子は、お主に恋慕の情を抱く。しかも、お主の性欲が高まっている時は、お主の煩惱、欲望、性衝動を叶えるべく行動してしまうわけじゃ。うむ、紛うことなき《悪瞳刺魂繫呪》じゃな」

そう、玉芽の言う通りだ。

俺に掛かっている呪いは、女の子に興奮――魅力に心が動かされた状態で目を合わせる時、自分に惚れさせてしまうのだ。しかも、俺が元氣いっぱい性欲が高まっている時には、俺の性的欲求が伝わって叶えようとしてしまうのだ。

いや、これだけなら嬉しい呪いだけど、この呪いにはもっと恐ろしいことが……。

「しかし、この大妖怪玉芽御前に《悪瞳刺魂繫呪》――長い、通称で良いか。アクメ、コホン、《悪瞳》を掛けるとは、お主……初代光基並みに強力な煩惱を持つておるようじゃの」

「強力な煩惱って失礼なっ！」

思わず抗議してから、ふと何かおかしなことに気が付いた。今、玉芽はなんと言った？何かおかしな単語が……。

「大妖怪!？」

てかここ玉芽神社だろっ。大妖怪玉芽御前の神社だろっ。なんだ気が付かない俺……。「何じゃ、今頃気が付いたのか。そうとも、妾は妖怪、それも大妖怪じゃ。十の牙と十の尾を持つあやかしとして、京の都を震撼させる予定であった妖怪じゃ」まじまじと玉芽を見る。彼女が妖怪であるということは、この狐耳はカチューシャとかではなく、本物だったことだ。

確かめるためにも、そっと狐耳を指先で触ってみる。

「な、何を、クウン♪」

猫撫で声、いや狐撫で声を玉芽が上げた。どうやら耳を触られると気持ちいいらしい。耳がヘニヤリと垂れて、脱力してしまう。

「おお、本物の狐耳だ」

狐耳を弄りながら、納得出来た。妖怪なんでものが本当に存在するとは思わなかったけど、呪いなんでものが実在するのだから、まあ居てもおかしくはない。

呪いを掛けられている張本人ならではの、冷静な判断だ。

「しかし、触り心地いいな」

「クウン、クーン……コオオオオン」

頭を俺に預けてされるがままに——なりかけて、玉芽が飛び退いた。

「な、な、何をするのじゃっ。この大妖怪玉芽御前の耳に、何を！」

「いやだって気持ちよさそうだったし」

「うむ、とても気持ち……ではなくてじゃあああっ。良いかつ、妾は九尾の狐で有名なかの玉藻の親戚ぞっ。ヤツめは、妾の従兄弟の娘の旦那の妹じゃ。どうじゃ、驚いたであらう？」

「誰それ？」

「きよ、教養のないヤツめつ。光基はもつと知性があつたぞ」

「そんな遠い先祖様のことを言われてもなあ」

そう答えた俺を、今度は玉芽が値踏みするようにジロジロと観察してくる。十秒ほどしてから、顎に手をやって玉芽が小さく頷いた。

「ふむ。遠いとは思えぬがな。何しろ、妾が掛けた呪詛である《悪瞳》が、しっかりとお主に引き継がれておる。ま、子々孫々まで呪詛が引き継がれるとは思っておらなんだが」

「ちよつと待て」

玉芽の言葉を、俺は眉間に指を突き立てながら遮った。

「今、なんつった？」

「引き継がれるか？」

「その前」

「あー、うー、妾が大妖怪？ しかも超絶美人で小野小町なんて目じゃない？ じゃろうじゃろう」

うんうんと玉芽が満足そうに頷く。

「んなこと言っていないだろう。てか美人ってより、残念系痴女だろ、お前は！」

「な、な、なんじゃとっ！」

「ああもう、とにかくだつ。お前つ、《悪瞳》を自分が掛けたって言ったよな！」

「うむ」

コクンと、素直に玉芽が頷く。

「そうか、そうか、なるほどな。お袋が言ったことは正しかったわけか」

「何がじゃ？」

玉芽が、右十五度ほど頭を傾ける。

「お前がどんな理由で光基つてご先祖様に呪いを掛けたかは知らないけど、俺には関係ないだろう」

「ふむ、それはそうじゃな」

「だから、俺のこの呪いを解いてくれつ。《悪瞳》を、お願いだから解いてくれ！」

「……ほう」

腕を組み、玉芽が上半身を傾けて顔を近づけて来た。

「《悪瞳》を解いて欲しいのか。じゃがいいのか？」

「何がだよ」

「お主が交わりたい相手を、必ず食える呪いぞ。男にとって、これほど都合のいい呪いはあるまい」

「張本人が、《悪瞳》の真の恐ろしさを知らないとは言わせねえぞ」

「ふむ。呪いで惚れさせた女子を食ったが最後、永遠に憎まれることかな？」

「ああ、そうだよつ」

「そうなのだ。《悪瞳刺魂繫呪》の真の恐ろしさはここに有る。

だって、好きになった女の子とはエッチしたいだろう？ 好きになっちゃったら、相手に興奮するに決まってるじゃないか。

イコール！

勝手に《悪瞳刺魂繫呪》の呪いが、相手に掛かるわけだ。そして、エッチしたら一生憎まれることになる。

一回だけ。たった一回しかエッチ出来ない。

そして嫌われる。

まさに悪魔の呪いだ……。《悪瞳刺魂繫呪》がある限り俺は、好きな相手と結ばれることはないのだ。

「その様子、お主はまだ童貞のようじゃな」

「ぐっ、言われたくないことをズバリと」

「光基の子孫らしからぬ男じゃな。光基めは、

『うほお、やり放題じゃんつ。やり捨て上等！』

とか、最低のことを言いながら、千人斬りを達成したそうじゃぞ」

「俺の祖先って……」

「女の敵を懲らしめるはずが、逆効果だったのじゃ……」

「いや、誰がどう考えても逆効果だろ」

「光基に群がる女子共に、実は愛などないと知って欲しかったのじゃ!」

叫んだ玉芽が、空を見上げた。そしてエグエグと泣き始める。

「性交の後に、愛した女に憎まれて悲しむ光基が、妾の愛に気付くと思ったのじゃあ……。そしたらあやつ自身が一番、誰よりも、男女の性交を楽しんでいるだけじゃったのじゃあ。妾の純情は弄ばれたのじゃあ」

呪いを掛けたことは迷惑極まりないが、玉芽が恋に破れた女性だと思つと、可哀想になつてくる。同情つてヤツが、心の中に湧いてくる。

「玉芽……」

「光平……じゃったな。同情はいらんぞ、お主に迷惑を掛けたのも事実じゃ」

「いや、俺は解いてくれさえすれば、玉芽を恨んだりほしくないよ」

「うむ。そのことじゃ」

玉芽が、じつと俺を見る。ゆっくりと口を開いた。

「妾には出来ん」

「……………は？」

「うむ。妾には解呪出来んのじゃ」

「な、な、な、お前が掛けた呪いだろぅが!!」

思わず詰め寄り、肩を掴んでガクガクと揺する。

「おごっ、ま、ま、ま、ま、ま、まつ、つつ、の、のほおお、じゃ、じゃじゃ、じゃあ」

ガクガクと頭を揺らしながら玉芽が、よく分からない戯言を口にする。

「何言つてんだが、分からねえつ。はつきり喋れ!」

「じゃじゃじゃ、かかからあ、ゆ、ゆれゆれえてえ」

「ああん!」

苛々して益々揺する。

瞬間、ぼろん。

誰がどう見ても、防御力が低すぎる胸元からポヨンとおっぱいが零れた。

いや、俺は悪くない。痴女妖怪の胸元の布地が少なすぎるのがいけないのだ。

「ゴクリ……」

それにしても、見事なおっぱいだ。九十センチ近くはあるうと言うのに、垂れていない。しっかりと弾力と張りがある。そのくせゴム鞣のような硬さはない。

この柔らかなおっぱいに顔を埋めたら、きつとフェニユフェニユとした柔らかさによって、俺の顔にジャストフィットするのだろう。

その後はもうおっぱいが醸し出すマイナスイオンに包まれて、心も肌も、俺は艶々になること間違いない。

「ん、んおおお、ゆ、揺れが収まったのじゃ。な、何が起きたのじゃ」

「ああ、お前のおっぱいが——」

反射的に顔を上げて玉芽の顔を見る。目と目が、合う。興奮した状態だ！

「しまった！」

「お、お主つ、またつ、やめいつ、いかん！」

玉芽が叫ぶと同時に、俺達を繋ぐ鎖が輝き出す。

「くっ、油断したのじゃっ。抜くの忘れておった！」

玉芽が右掌（右のひら）をにぎにぎとさせる。

「え、又クッて……こ、こんな青空で？」

思わず股間（股）を両手でガード。

「そっちではないわ！」

いきなり玉芽が、胸元の鎖を掴んだ。

「ぬうううっ、ファンガ——！」

可愛らしさの欠片（かけら）もない雄叫び（おなひび）を、鼻の穴を大きくさせながら上げ、玉芽が鎖を引っ張る。すると、ずぶりと玉芽の中から《鬼神魂魄刀》が抜け出て、雲散霧消した。

「ハアツ、ハアツハアツ……不覚であったわ。二度目は掛かりやすいこと、忘れておったのじゃ」

荒い息を吐きながら、玉芽が俺を睨む。

「こ、この節操なしめっ。やはり光基の子孫よな！」

「な、何がだよ！」

「この呪いの元凶、玉芽御前まで手籠めにする気であつたらう！ この女の敵つ、淫乱男、好き者め！」

「なんでそうなるんだよっ！」

「当たり前であろう、妾の、妾の乳房で興奮しまくっていたであろう！」

「そ、それはお前が、痴女みたいな格好してるからだろう。おっぱいモロ出ししやがって！」

ピシリとおっぱいを指差す。指差されて、玉芽が慌てておっぱいを服の中にしまい込む。

「う、うるさいっ。この布地の少ない衣装には意味があるのじゃっ」

「痴女って意味だろ」

「違うのじゃっ！ 良いか、よおおおおお聞く。これは願掛けじゃ」

「願掛けって、ええと、お茶を我慢して願いを叶えるとか、そーいうヤツだっけ」

「うむ。願掛けとは日常的な何かに耐えることにより、願いが叶うように祈る行為じゃ。そして妾は、日常的に衣装の布面積を少なくする恥辱に耐えることで、身を焦がすような

甘い甘い恋愛を祈っておるのじゃ！」

「恥辱って、どこも恥ずかしそうじゃねーじゃねえか！」

「あーうん、実は最初は恥ずかしくて堪らなかつたのじゃが、徐々に見られていると思う

と、何だかこう、体の芯が熱くじやな」

「ただの露出狂じゃねえか!!」

「な、な、な、人を変態呼ばわりしおったなっ。この童貞小僧が!」

「うるせえっ、大年増の中古品!」

「失敬なっ。妾はまだ未体験じゃっ、未開通の新品年増じゃ!」

叫んだ瞬間、玉芽が頭を抱えてしやがみ込んだ。

「ああっ、己自身で年増とか言うてしもうたああああああああ」

「ああ、うん、新品年増って平たく言ううと、モテない人生をあからさまに語り過ぎてるもんな」

ちよっと同情してしまう。

「ど、同情しおったなっ。妾は、あれじゃ、ちよっと高望みが過ぎるだけなのじゃっ。そうとも、この豊満且つ色気に溢れた肉体を持つ妾じゃぞ、その気になれば男なんぞ、すぐでも捕まえられるわい!」

「えー、そーかなあ。性格に難がありそーだしなあ」

「し、失敬な。ぐぬぬぬ、ほれほれ!」

いきなり玉芽が、おっぱいを下から寄せて上げる。深い、千尋の谷もかくやという深い谷間がそこに出来る。

「どうじゃっ、魅力的な乳房であろう!」

「い、いや、だからっ」

俺は顔を手で隠す。健全な男の子なのだ。

いくら露出狂で痴女で妖怪だっって言っても、おっぱいを見たら興奮してしまう。

衣服の上から、ブラジャーをしているおっぱいだって、揺れるのを見ると興奮してしまうのに、このおっぱいはノーブラな上に、半分以上出して肌が見えるのだ。

「ええいっ、人と話す時はちゃんと目を見て話さぬか!」

玉芽が俺の手を握る。

「いやでも、それはまずいだろうが!」

「ふふーん、分かったのじゃ。童貞故に、女子の顔を見て話せぬのじゃな」

「いや、まあ、それもあるけど——じゃなくて、今はだ!」

「ほれほれ、ちゃんと妾の顔を見るのじゃ、この美しい妾の顔を見て話せるものなら話すのじゃ!」

俺の話を全く聞かず、玉芽が無理矢理に手を引きはがした。

目と目が、合っちゃう……。

その瞬間、あっさり《悪瞳刺魂撃呪》が発動する。ズブリと、《鬼神魂魄刀》が玉芽に刺さる。

「い、いかんっ、《鬼刀》が入ってくるうううう……」

いや、ギリギリの所で鎖を掴む。《鬼神魂魄刀》が、半分ちよっと程度挿入されただけ



だ。

玉芽が、黙った。

一步、前へ出る。ニマアとした笑顔でだ。

「ああん、もうっ。愛いヤツじゃっ、妾の乳房に顔を突つ込みたいのであれば、まずはちょっとだけ……つてええええええつ、いかんっ」

鎖を握った拳に力を入れ、玉芽が思いつきり《鬼神魂魄刀》を引き抜いた。

「ハアツ、ハアツハアツ、危うい所で《悪瞳》するところであつたわ!」

「いや、お前が馬鹿なだけだろ!」

「なっ。妾のどこが馬鹿なのじゃっ。ほれ、よく見てみいっ。この知性溢れる瞳を!」

玉芽がぐいっつ顔を近づけてくる。当然、目と目がまた合ってしまった。

もちろん、俺のパトスの荒波は、まだまだ嵐の最中だ。《悪瞳刺魂繫呪》が発動して、《鬼神魂魄刀》が刺さりかけるのを、なんとか玉芽が押さえる。

「あのなあ」

呆れてものが言えないとは、このことだ……。

「あつ、ちよつ、ダメツ、ダメなのに、この気持ち急上昇なのじゃ♥も、もう、ちょっとだけよ?」

ハラリと、右おっぱいだけを露出させようとして、玉芽が慌てて踏みとどまる。

「じゃなくて——っ」

再び《鬼刀》を引き抜き、砕く。その様子に、俺は思わずため息を吐いた。

「なあ玉芽。学習って言葉、知ってるか?」

「ぐ、ぐぬうううう、バーカバーカ、バーカツ」

小学生かつ。

「わ、妾の乙女心まで何度も弄んだ、その罪っ。万死に値するのじゃ!」

「あのなっ、ほとんど全部、玉芽の自爆だろうが!」

「しりませ——ん、のじゃっ。聞こえませ——ん、のじゃっ!」

狐耳を両方押さえて、玉芽が叫ぶ。

「良いかつ。お前は光基の代理じゃっ。恋愛地獄に落ち、女不信に成り果てるがよいわ! 女にモテ過ぎて困るがよいのじゃっ! バーカーバーカ、バ——カ!」

「お、おいっ、俺は悪くないだろ!」

叫んでも、狐耳をびつたりと両手で閉じた玉芽には届いてくれない。

「お主が苦しむ様、妾は楽しくお菓子でも食いながら観察してくれるわっ。ふふ、ふふふ、ふはははははははははははははははは!」

いきなり玉芽が飛び上がる。

空中で振り返り、俺にあつかんべくだ。

ゴツン——鳥居に後頭部をぶつけ、墜落した。

そのまま階段を転がり落ちていく……。

「……って、追わないと！」  
 あまりの有様に呆然と見ていてしまった。慌てて後を追ひ、俺は階段を見下ろす。  
 そこにはもう、玉芽の姿はなかった。

「俺のっ、俺の呪いはど——なるんだよ——なるんだよ——！」  
 俺の叫びが、虚しく夏の空に響き渡っていった……。

※ ※ ※

玉芽と出会う一ヶ月前のことだ。

俺はお袋のいつもの帰宅時間になったのを確認して、食卓の椅子から降りて床に正座をした。

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

台所に居たTシャツにホットパンツにライオンマークのエプロンという姿の妹のゆなが、怪訝そうな顔を向けてくる。台所と言っても、3LDKのマンションだ。ダイニングと一体化していて振り返るだけで済む。

「ゆな、お前には関係ない。気にせず料理を続けていてくれ。兄は、焦げた料理など食いたくはない」

俺の返答に、ゆながちよつと頬を膨らませて不平を表す。

入学直後の健康診断によれば身長百五十三センチ、四十三キロ、バスト七十三、ウエスト五十五、ヒップ七十八と、十三歳としてはやや貧相な胸を持つ妹だ。

ただ、兄から見てもお世辞ではなく、明るく元気でチャーミングな美少女だ。瞳は大きくくりくりとしていて、コロコロと表情が変わる。肩まで伸ばしている、ちよつとクセのある髪の毛も、ゆなのチャーミングさを引き立てていると思う。

そんなゆなが、顔だけではなく体全体で俺の方を向き、腰に左手を当て、人差し指を立てた右手を突き出してきた。

「あのね、お兄ちゃん。料理の出来ないお母さんとお兄ちゃんの面倒を、ゆなはずっとみてきているんだよ？ 謂わば、料理のプロといっても過言ではありません。そんなミスをするわけないでしょ」

立てた人差し指をチツチツと左右に振る。

「ゆなよ。今宵は青椒肉絲であつたな」

「で、ござる」

「さすがの兄も知っているぞ。オイスターソースに片栗粉に、砂糖とか……ああと、あとなんかを入れた合わせ調味料を使っているわけだ」

「塩こしょう、あと醤油とお酒だよ、お兄ちゃん」

「うむ。それはもう投入したな？」

「戦力の逐次投入の愚は犯してはおりませんよ、お兄ちゃん。ガバツと投入してらでござ



る。

「あれ、ちゃんと混ぜ続けないと焦げるだろ」

「あっ」

右手を口に当て、ゆなが慌てて振り返った。

「あ、ああああああああああ。大惨事でござるよ、お兄ちゃん！」

しゃもじで、フライパンにくっついたタケノコや牛肉を、ゆなが必死に引きはがし始めた。

兄の俺とは違い、頭の回転もよく、勉強も出来る妹だが、時折抜けているのが弱点といえは弱点だった。

と、ガチャリと玄関が開く音がする。

お袋が帰ってきたらしい。

母子家庭である我が家は、キャリアアウーマンであるお袋の稼ぎで生計を立てている。バイトをしようと思ったのだが、お袋の方針によって残念ながら却下されていた。バ

方針だけではなく、《悪腫<sup>あくめしこんけいじゆ</sup>刺魂繫呪》の被害者を増やしかねないという事情もあるのだが。

「あら、今夜は青椒肉絲なのね。お母さん、ゆなの青椒肉絲大好きよ」

扉を開けて入って来たお袋が、鼻をヒクヒクとさせながらリビングのソファに向かう。百六十センチを超える身長でスカートではなくパンツのスーツがビシリと似合う、如<sup>いか</sup>

にもやり手のお袋だ。実際、三十六歳だが会社では異例の出世を続け、その仕事ぶりと外見から『みのり女帝』と呼ばれているとか……。

そんなお袋だが、俺とゆなのおかえりなさいという挨拶に軽く応えて手を挙げると、上着と鞆をソファに投げ捨て、隠そうともせずに服を脱ぎ、ソファの片隅に積まれていたよれよれTシャツと短パンを着込んだ。

「ハアアアア、今日も一日よー働いたわあ」

冷蔵庫から缶ビールを取り出し、食卓の自分の席に着き、いきなりプシューと開けグビグビと飲み始める。

その様子をニコニコと見ながらゆなが、青椒肉絲の大皿を食卓の真ん中に、そしてお袋のために用意しておいた枝豆（塩分強め）をその前に置く。

「キャ——♥ ビールに枝豆とか最強無敵タッグじゃないのっ。もおお、ゆなちゃん、今すぐにでもアタシのお嫁さんにしたいわあ」

顔の横で両手を握り、瞳にハートマークを浮かべて狂喜乱舞する。

どうでもいいが、床に正座している俺のことは、全く欠片も眼中にないらしい。

「あのお、お袋？」

おそるおそる声を上げた途端、枝豆を食べる手を止めてお袋がビールを飲んだ。

「プハア、うめえっ！」

「正座してる息子を無視かよ！」

思わず突っ込むと、ジロリと睨まれる。

「なによ、不肖の息子。また《悪瞳》で誰かに迷惑掛けたわけ？」

「またって失礼なっ。俺の人生で呪いを発動させた相手は、三人だけだろ！」

「あ、ゆなをカウントしてないでしょ」

南部鉄器製の釜を備えた、ちよっとお高い炊飯ジャーからご飯をよそっていたゆなが、唇を尖らせた。

「あんな。お前は俺の呪いに耐性があるからいいんだよ」

「えー。実の妹に欲情しておいて、それはないんじゃないかなあ。ね、お兄ちゃん」

ゆなが含み笑う。

「お前が、家の中じゃノーブラなのが悪いんだろっ。風呂上がりなんて、Tシャツ一枚で歩き回るし！」

「最近パンツ穿いてるよ？」

「……ノーパンTシャツは、目に毒過ぎるからホントやめて下さい」

「はあい♥」

ゆながクスクスと笑い、俺の分のご飯をよそう。

「で、光平。結局、お母さんに何の用なのよ。誰かを《悪瞳》させたわけじゃないんでしょう？」

いつの間にか枝豆の殻の山を築いたお袋が、二本目の缶ビールを開ける。

「ああ、させてない」  
 「そりゃそうよねえ。だから男子校に突っ込んだんだし。あ、もしかして男子と恋をしたとか？ やーねえ、お母さん、そっちも行ける口よ」

「違うわい！」

「はいはい。で、なによ。お小遣いアップなら却下だからね」

「《悪瞳刺魂繫呪》の呪いを、解きたいんだ」

「……………は？」

飲みかけていたビール缶を口元で止め、お袋がビールを飲んだらノンアルコールビールだった時のような顔をゆっくりと俺に向ける。

「だから、この呪いを解きたい」

「本気で言ってるの？ お父さんの家に代々、もう千年近く伝わってきた呪いよ？」

「解こうとしたご先祖様、一人もいないんだろ？」

「まあねえ。みんなやり捨て上等の、男として最低っていうか、女の敵ばかりだったらしいわね…………」

お袋がちびりとビールを口に含む。そんなお袋の前に、鶏ガラスープと塩こしょうでさっと炒めたもやしを置き、ゆなが微笑んだ。

「でもお父さんは違ったんでしょ？」

「アイツは別の意味で最低野郎だったのよ」

苦々しく言うと、お袋が俺に向き直った。

「好きな子でも出来たの？」

「フツ、小学校一年生で初恋相手を発情させて以降、俺に恋なんてあるわけないだろう」

「そうね。小一の女の子に、自分からスカートをめくらせるとか、ホント最低の男よね、我が息子ながら」

「スカートの中には神秘があるって思ってたんだよ！」

「今は？」

「パンツの中には神秘、そう夢と穴がある」

「こいつ…………」

「お兄ちゃん最低…………」

お袋と妹が全く同じ、汚物でも見るような顔をした。さすがは親子で、共にマゾなら大感動の百点満点な蔑む視線だ。

「とにかくだっ、俺だって健全な男子高校生だぞっ。恋の一つもしたくないだよ！」

「どうしたのよ、いきなり。どうせアンタなんて、モテないんだから諦めなさいよ」

「それが母親が言う言葉か！」

「だってねえ。顔が良いわけでもないし、お金があるわけでもない、軽妙なトークだって出来ないし、運動神経はまあ良い方だけど、花形スポーツじゃなくて剣術だもんねえ。あれ、汗臭いのによーやるわ」

「そ、そこまで言うか……。くそ、そもそもイケメンに産んでくれなかったお袋が悪いだろー！」

「知らないわよ。お母さんに似ないで、あのクソ野郎に勝手に似たのはアンタでしょうが」

「ああもうっ。とにかくだ、呪いだ。この呪いを解いて、俺だって恋がしたいんだよ！」

ドンドンと床を俺は叩いた。

そんな俺を冷たく見下ろしながら、お袋がゆなに声を掛けた。

「何があったの？」

「最近お兄ちゃん、ゆなの少女漫画とか読んでるから……」

「アホね」

一刀両断だ。

「アホで悪かったな！」

思わず叫んだ俺に、お袋がやれやれと頭を振った。ゆっくりと長い長いため息を吐き、顔を上げて俺を真剣な顔で見る。

口を開き——かけ、やっぱりビールを飲み始める。

「おい！」

「はいはい、ちょっと喉が渴いただけじゃない。そんなんじゃ、モチないわよ？」

ビール缶を食卓の上に置き、お袋が足を組んだ。自分の母親ながら引き締まった美脚で、

足を組む姿勢がよく似合っている。

「光平、転校する覚悟はある？」

「転校って、どういうことだよ。呪術の学校にでも入れて言うのか？」

「そんな学校があるわけじゃないでしょ。呪いを叩くには、根本からってことよ」

お袋がパシントンと左掌こぶしに、右拳を打ち付ける。

「そんな水虫みたいな……」

「呪いも水虫も似たようなもんよ。いい、ご先祖様の光基みつもとって人に呪いを掛けた妖怪がいるのよ。その妖怪を奉まつった神社が狐尾市こびにあるわ」

「狐尾市って、家があった街じゃないか。親父おやじ、まだ住んでるんだろ？」

一瞬、親父の顔が思い浮かぶ。お袋と共に家を出てから、ほとんど会っていない。ただ家柄を鼻に掛けた尊大な人だったという記憶はある。

お袋がそんな親父と喧嘩別れをして俺達を連れ出した小学校一年生まで、住んでいたのが長野県の地方都市である狐尾市だ。ゆなは当時まだ三歳で、ほとんど記憶がないらしい。

「そうよ。アンタが初恋相手を、その性欲の毒牙どくがに掛けた街よ」

「それを言わないでくれ……」

「ま、何があるかは分からないけど、ヒントがあるとすれば妖怪を奉った神社、玉芽神社たまめくらいしか思い付かないわね」

「玉芽神社？ 聞いたことがあるような……」

「アンタが小さい頃、入るなっていう親の言いつけ無視しまくって遊んでた神社よ」  
呆れ顔をされてしまった。

「とにかく、玉芽神社を中心に探し回るしかないわね」

「狐尾市の学校に転校して、腰を据えて探れってわけか」

「そういうことよ。あの街に戻れば、ま、色々と問題が起きるでしょうけど、一人で乗り越えられるかしらね」

お袋が再び食卓に向き直り、もやしでビールを飲み始める。

「任せてくれよ。武道で鍛えたこの精神力もあるから、『悪腫』を発動させることも、ま、ないしな」

「いいこと。お母さんは、あの街にも、あのクソ野郎にも絶対に会いたくないから、助けには行かないわよ。何があっても、アンタ一人の力でどうにかするのよ？」

俺を向くことなく、お袋が念を押してくる。

「分かってる」

「……………はああああ。仕方ないわね、なら金毛学園に転校枠を無理矢理作ってあげるわよ」

「無理矢理って、そんなこと出来るのかよ」

「忘れたの？ あのクソ野郎のこと」

「あ…………」

「そういうこと。その後の転校手続きは取ってあげるわ。住む部屋の手配もね」

「ありがとう、お袋！」

床に手を突き、しっかりと俺は頭を下げる。その頭に、お袋が冷酷な事実を一つ突きつけた。

「転入試験、頑張っつね。今のアンタの成績だと、かなりギリギリよ」

「……………猛勉強させていただきます」

絞り出すように俺が言った直後だ。ゆなが、青椒肉絲を食べていた箸を置いて、にこやかに宣言をした。

「ゆなの成績なら楽勝だよ。ゆなも、お兄ちゃんと一緒に転校するね」

「ちよっと待って。なんでそーなるんだよ？」

俺の疑問に、ゆなが迷いなく断言した。

「お兄ちゃん、料理全然出来ないでしょ？ それからお洗濯もよく柔軟剤入れ忘れるし、お皿よく割るし、ゴミの分別適当だし、お買い物は雑だし、そんな生活能力皆無なお兄ちゃんを放っておけると思う？」

「いやでも、そのうち慣れると思うしさ」

「はあああ、分かってないなあ」

「何がだよ」

「ゆなはね、お兄ちゃんが心配なの！ 分からないかなあ、この妹の兄を思う心が」

「そ、そうは言ってもだ。お袋もなんとか言ってくれよ」  
 「まあ、ダメ息子がダメで心配ってのはお母さんも同じだけど、当たり前だけどゆなの方が心配なわけ。分かるわよね、ゆな？」

そう言ったお袋の顔を、ゆながジロリと睨み返した。そして始まる、女の戦い……結局三時間だ。延々とお袋とゆなの口論が続いて、お袋が敗北したのだった。

「光平、モテないからって、近親相姦きょうこんあひらだけは許さないからね」

「真剣な顔で心配しないでくれ……」



狐尾市には、中央にやや大きな湖が存在している。

風光明媚ゆめびな土地ではあるが、同時に日本を代表する企業である十珂とグループの拠点があ  
 る街でもあった。十珂グループは今の日本では珍しい財閥であり、政財界に隠然たる勢力  
 を持っていると囁かれたりもしている。

そんな企業の拠点がある企業城下町だ。当然ながら、狐尾市は経済的にもかなり繁栄し  
 ていた。

そして俺達が転校する金毛学園は狐尾市の中心部に広大な敷地を持つ、十珂グループに  
 よって運営されている私学だった。

当然、十珂グループ関係者が多く通っている。

「で、ここがその十珂グループの士官学校と言われている金毛学園か」  
 俺とゆなは、仲良く学園の正門を見上げた。

玉芽との出会いの翌日だ。引越し作業は、まだ開けていない段ボールが山積み状態だ  
 が、取り敢えず転校初日ということで学園にやって来たのだ。



「お兄ちゃん、門、でっかいよ」  
隣のゆなが、呆然と眩いた。

確かにでかい。なんで門柱に二階くらいまでの高さが必要なのだろうか。鉄柱が並んだ門も、同じくでかい。

開いた門の右側には、ちょっとした一軒家に見える守衛さんの詰め所がある。

そこらにある普通の学校に通っていた俺とゆなには、この正門だけでかなりのプレッシャーだ。

「ど、どんな人達を通ってるのかな。やっぱりお金持ちが多いのかな。鞆がブランド物だったり、ベンツで送り迎えだったり、お昼ご飯がおせち料理だったりするのかな」

「ゆな、少女漫画の読み過ぎだ。見る、普通に歩いて登校してるじゃないか」

正門前の、道路のど真ん中で呆然とする兄妹を、チラチラと見つつ生徒達が普通に歩いて登校している。

鞆は、みんな普通だ。ダイヤが付いたり、高級ブランドのマークがあったりはしない。背後に執事やメイドが付き添っていることもない。

「そ、そうだよ。同じ人間だもん。同じ人間だもんね」

ゆなが頷き、一步を踏み出そうとした瞬間、

プー

けたたましいクラクションが鳴り響いた。

「ひよああああああああああっ!」

ゆなが飛び上がり、俺の腕に抱きついてくる。

体勢を崩しながら、おそろおそろ振り返ると——黒い光沢を放つ外車がいた。窓も外からのぞき込めないように黒く染まっている。

慌てて道を空けると、車が静かに正門の中に入っていく。半分開いた窓の中には、間違いない金毛学園の制服を着た男子が座っていた。

茶髪をかつちりとセットした、細身のイケメンだ。

チラリと俺達を見て鼻で笑いやがったのを、俺はしっかりと見た。見た瞬間、如何にもお坊ちゃまで、両親とか家の力を自分の力と勘違いしてる系の、いけ好かない大嫌いなタイプだと分かった。

にしたって、「このクソ庶民が」的に鼻で笑うことはないだろうっ。

くそ、そんなに俺達は場違いな雰囲気を持つてるって言うのか!

「こ、高級外車だよ。運転手付きで登下校だよ!」

ゆながパニックを起こしている。うん、場違いと言われて反論は出来ないな……。

「落ち着けゆな。今日がたまたま高級外車デーだっただけかも知れん」

「そんなイベントある学園、もっと怖いよ!」

ゆなの言い分も、もったもである。

「貴方達、そこで何をしているの? 正門前は漫才をする場所ではないと思うのだけど」

凜とした声が掛けられた。

「す、すいませんっ」

「ごめんなさいっ！」

兄妹仲良く慌てて振り向いて頭を下げる。ああ、小市民……。

「やだ、怒ってるわけじゃないのよ。見たことがない顔だけど、もしかして転校生かしら？」

俺達は仲良く「はい！」と返事をして、仲良く顔を上げた。

目が点になった。

意識が、心が、目の前の少女に吸い寄せられるような感覚。ようやく巡り会えた。まるで前世の恋人に出会ったかのような、そんな感覚だ。

もしかして、これ一目惚れ——瞬間、ゴスツとゆなに脇腹へ肘鉄をくらってしまった。おかげで、頭の中が少し冷静になる。

俺達に声を掛けたのは、一人の少女だ。制服からすると、同じ高校生のようだ。

黒く艶やかでサラサラなロングヘアで、身長は百六十をちよつと超えたほどだろうか。スタイルは良さそうだが、色気というよりも清楚な印象を受ける。

涼やかな目元と知性的な瞳を持った、落ち着いた雰囲気の良い少女だ。

こんな子と付き合えたら最高だろう、きつと誰だつて夢に見るだろう。そして、無理だからとさっさと諦める。それほどの美人だ。



ただ、なんだろう。俺が吸い寄せられたのは、彼女の美しさだけではなかった気がする。どこか懐かしい、どこか心が落ち着く、そしてスカートの中すらも——じゃないや、彼女を誰よりも俺は知っている、そんな感覚があった気がする。

「何かしら？」

俺の視線に、不思議そうに少女が小首を傾げた。

「あ、いや、なんでも」

「初めての学校で戸惑うのは分かるけれど、あまり女の子の顔を見つめないでね」

「ご、ごめんなさい」

「ホ、ホント粗忽な兄でごめんなさい！」

ゆなまで頭を下げる。そんな俺達に、少女がクスリと微笑む。

「仲の良い兄妹なのね。いいわ。私が校長室まで案内してあげるわね。中等部も高等部も同じ先生だから」

少女は、俺とゆなが拒否することなど想定もしないで歩き出してしまふ。

確かにその背中には、威厳というか、逆らいたいがたい雰囲気張り付いていて、俺とゆなは自然とその後を、カルガモの雛のように追ってしまった。

そのままヒョコヒョコついて行くと、少女は教室がある校舎とは別棟の、職員室などが入った建物の廊下に入って行く。

わざわざ別の建物があるし、チラリと見えた体育館も大きいし、やっぱりお金が唸って

いる学園らしい。

しかし歩いてみると、あちこちから視線がぶつかってくる。

最初は、俺とゆなが場違いすぎて見られているのかと思っただけど、どうやら違うらしい。目の前の少女が、目立っているのだ。

「そうそう、まだ自己紹介をしていなかったわよね」

少女がチラリと振り返った。

「私は早乙女沙月、高校の一年B組よ」

「どこかで聞いたような……。そう俺が首を傾げていると、ゆなが口を開いた。

「千種ゆな、中学一年生です」

学園の雰囲気慣れたのか、静かに微笑みながらだ。本人としてはお嬢様のフリをしているらしい。残念ながらそうは見えないけど。

とりあえず、俺は疑問を頭の片隅に追いやった。呪いのおかげで、女の子には近寄らないようにして来たのだ。

ぶっちゃけ、女の子と話す体験なんてあまりしていない。かなり、いや凄く緊張してしまふ。

「あー、その……俺は千種光平。ゆなの兄貴だ」

つかえた後に、かなり駆け足の口調になってしまった。そんな俺の言葉が聞き取りにくかったのか、早乙女さんがピタリと足を止める。

「千種、よね」

「き、聞き取りにくかったかな。その通りだけど」

「いえ、平気よ。ただちょっと嫌な記憶が過ぎったんだけど、気のせいみたい」  
軽く肩をすくめ、また歩き出す。

いやでも、俺も引つかかって、彼女も引つかかったっていうのは、偶然にしては出来ず  
ぎだ。

「いや、ちょっと——」

俺がその声を掛けた瞬間だ。早乙女さんが、ピタリと立ち止まってしまった。

「早乙女さん？」「早乙女さん？」

兄妹仲良く聞いたが、早乙女さんは前方を睨んだまま答えてくれない。なんだろうと、  
これまた兄妹仲良く早乙女さんの視線の先へ目を遣る。

そこには、人の群れがあった。

十人ほどの男子生徒が固まって歩いてくる。いや、中央にいる一人の男子生徒に、全員  
が付き従っているのだ。そして俺は、その生徒に見覚えがあった。

ついさつき、俺達にクラクションを鳴らした高級外車に乗っていた生徒だ。

「三ツ矢徹……」

早乙女さんが、何やら呟いた。どうやらあのいけ好かない男の名前らしい。

「おや、沙月じゃないか。ところで、その後ろの庶民二人はキミの知り合いかい？」

わざわざ庶民とか付けて話しかけてきやがった。

「転校生を校長室へ案内しているだけよ」

「なるほど。真面目で全校生徒の人氣も高い、早乙女家の沙月だけあるね。どうか、そ  
の役目を代わってあげようか？」

「遠慮するわ。三ツ矢家の御曹司にそんなことさせられないもの」

馴れ馴れしい態度の三ツ矢を、早乙女さんがきっぱりとあしらう。すると三ツ矢が、小  
さく舌打ちした後には俺達を睨んできた。

「なあそこの庶民二人組。沙月の手を煩わせるなんて、どういう了見かな」

「ど、どういう了見って……」

ゆなが不安そうに俺を見上げた。当然、ゆなを背中に庇うように俺は前へ出た。

が——早乙女さんが、さらに前へ出て行く。三ツ矢と俺達兄妹の間に立ったのだ。

「沙月、どういうつもりかな」

「どうもこうもないわよ。私はただ、この二人を校長室へ案内するだけよ。いくら三ツ矢  
くんでも、そこまで私の行動を左右する権利はないわ」

「ほう、権利ね」

三ツ矢が、ジロジロと沙月を爪先から頭のとっぺんまで見つめた。

「ま、いいだろう。沙月、キミのそういう正義漢ぶったところも、嫌いじゃないからね。  
ただし——」

ジロリと三ツ矢が、何故か俺を睨んだ。とりあえず咄嗟に、俯く。

「お兄ちゃん……」

「妹よ。トラブルはごめんだ」

呆れた様子のゆなに、ボソボソと返す。

「分かってるわよ。そんな心配はいらないって貴方が一番分かっているでしょう？」

「ま、そうだけどね。せいぜい、庶民に優しいお嬢様の役を楽しむがいいさ」

肩をすくめて、三ツ矢が歩き出す。十人の男子生徒がぞろぞろと続いて動き出す。

途中、三ツ矢を始めとして全員に睨まれてしまった。なんなんだ、俺がいったい何をし  
たって言うんだ……。

「教室とは反対方向……彼ら、今日はサボるみたいね」

ボソリと早乙女さんが呟く。

「ふ、不良なんだ。変なのと関わっちゃったなあ」

ゆながうんざりとした声を上げる。

「ごめんなさいね、千種くん、ゆなさん」

三ツ矢達の背中が見えなくなつてから、早乙女さんが歩きながら頭を下げてきた。

「いや、謝られるようなことは……」

「うん。詳しい事情を話す気はないけど、貴方が絡まれたのは、私のせいなの。だから、  
一つ忠告しておくわ」

「忠告って言うത്？」

「妹さんも千種くんも、あの三ツ矢徹つて男には、なるべく関わらないで。見て分かる通  
り、我が儘で自己中心的で、何をしでかすか分からない人だから」

「わ、分かった」

「ゆなも、分かりましたっ。てか、ゆな、ああいうタイプ大っ嫌いだし」

「ゆなさん、そういうことも言わない方がいいわよ。三ツ矢に告げ口する生徒もいるか  
ら」

「う、うああ……お兄ちゃん、すごい所だよ、ここ」

「お、おう」

「千種くんは無理だけど、ゆなさん。困ったことがあったら言ってね。私が力になるか  
ら」

「早乙女さん、ありがとうございますー！」

深々とゆなが頭を下げる。ところで、なんで俺は対象外なんでしょうか……。

「着いたわ。ここが校長室よ」

早乙女さんが喋りながら立ち止まる。

「あら、ごめんね。何かしら？」

「いや、なんというか……」

真正面から見つめられて、思わず口籠もつてしまう純情な俺……。そんな俺に、早乙女

さんがぴしやりと告げる。

「大事な用事でないなら、時間もそうないし、私は自分の教室に戻るわね」  
返事も聞かずに、さっさと廊下を戻って行ってしまった。

「……俺、いきなり嫌われた？」

ぽうぜん  
呆然と自分を指差した俺に、ゆなが苦笑する。

「ああいう性格なんだと思うな。優しい人だと思っただけ、お堅い感じだよね」

「なるほどな。如何にも優等生って感じか」

「お兄ちゃん、早乙女さんのこと気になったみたいだけど、呪いが解けるまでは下手に女の子に近づいちゃだめだからね」

ビシッと人差し指を、ゆなが俺に向ける。

「分かってるよ。三ツ矢って怖いヤツもいるし、そもそも俺はずっと近寄りちゃだめって言われて来て、女性が苦手なんだ。そう簡単にお近づきになれるわけないだろう」

「でもなあ」

「兄貴を信用しろって」

「……いい、女嫌いって感じで行ってよ？ 根がスケベなんだからね」

「分かった、分かったから。ほら、校長室に入るぞ」

態とらしくやれやれと頭を揺すったゆなを無視して、俺は扉をノックしたのだった。

※ ※ ※

簡単な自己紹介を終えて、教室最後列の窓際の席に移動して俺は目を丸くした。

「さ、早乙女さん……」

「奇遇ね」

隣の席に座っていた早乙女さんが、驚いた様子も、まして感動した様子もなく、振り向くこともなく、平然と口にする。

奇遇ってわりには、ホントに感動がないんですが……。

「ええと、さっきはありがとう」

「どういたしまして」

抑揚のない、つっけんどんな早乙女さんの返事を聞きながら、俺は席に座った。

特にもう話すことはないし、下手に近寄るなどゆなにも釘を刺されている。本来なら、この奇遇を梃子に、お近づきになりたいところだが、俺は断腸の思いで素直に教科書やノートを机の中にしまった。

そんな俺の様子を、早乙女さんが不思議そうに見てくる。

「なに？」

「……なんでも」

早乙女さんが慌てて視線を外し、小さく頭を振った。

そしてすぐに、もう興味が無いと前を向いてしまう。  
よく分からない女の子だ。

そのまま、それ以上なんの会話もなく十分のHRが終わっていく。終わったなら終わったで、俺を見ることなく立ち上がって教室を出て行く。

そう、次の授業はいきなり体育、それも水泳なのだ。

「おいおい、目で追ってるけど早乙女さんは無理だぜ？」  
いきなり、軽薄そうな声だ。

振り返ると、俺の前の席の男子だ。背格好は俺と同じくらいで、なかなか引き締まった体つきをしている。

「ああ、俺は湯浅孝司。よろしくな」

笑顔を浮かべると、悔しいが爽やかで、イケメンと呼ばれる人種だ。

クラスの男女比率は五対五だ。そんな中で、この男はきつと良い思いをしているのだろう。たとえ呪いがなくても、絶対にこの男よりモテないと断言出来る顔の俺だ。

やり場のない怒りを覚えつつも、仕方なく挨拶を返した。

「……よろしく」

「おう、よろしくな」

俺の暗い怒りなんか気にしない、爽やかな返した。どうやら、精神性でも俺は大きく引けを取っているらしい。

「で、無理ってなんだよ。もう彼氏がいるとかか？」

早乙女さんは綺麗だ。既に開通済みだって、何の不思議もない。要するにもう俺のモノにはならない。

ああ、俺には輝かない青春があるのか……。

「違う違う。ま、更衣室へ移動しながら話すか」

苦笑しながら湯浅が水着が入った袋を手に取り、歩き出す。

「じゃあ、何が無理なんだ？」

湯浅に聞きつつ歩き、俺はちよつと不思議な光景を見た。

どう見たってモテ力が高そうな湯浅を、女子達はヒソヒソと話しながら避けるのだ。もう、綺麗に、蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていく。

首を捻っていると、湯浅が明るい声で話しかけてくる。

「早乙女さんな、男嫌いなんだよ」

「男嫌いだ？」

「そうそう。なんでも悲惨な初恋をしたらしいぜ。相手の男に騙されたとか聞いたな」  
「騙された？ あんな美人を騙したのかよ。それは酷いな」

さぞ顔のいい男が、しかも年上とかが、早乙女さんの純情な心を弄んだのだろう。なんてヤツだ。同じ男として、絶対に許すことが出来ない。

「ま、そんなことがあって男嫌いなんだよ」

「しかし、それだったら開通済みって可能性もあるだろう」  
俺の疑問に、湯浅がハッキリと頭を左右に振った。

「それはないな」

「どうしてそんなことが言えるんだ？」

「早乙女さんな、ああ見えて、ご令嬢なんだよ」

「ああ見えてって……いや、普通にご令嬢でもおかしくない綺麗さだろ」

「ああ、容姿はな。でもな、この学園でご令嬢って言えば、そうじゃねえんだ」

湯浅がキョロキョロと周りを見てから、声を潜める。

「ここが十珂グループの士官学校ってのは知ってるだろ？」

「ああ。社員や、幹部の子息が大量にいるんだろ。で、ここで勉強して大学までエスカレーターで進んで、そのまま十珂グループに就職するわけだ」

「そうだ。そういう連中は大抵小学校から、通ってるからな。通称、インナーって呼ばれてるんだよ」

十珂グループ社員ともなれば、給料はかなり高額だ。その子息ってことで、みんな裕福な生活をしているそうだ。さらにいえば親の社内での立場も子供に反映されて、一種独特なコミュニケーションを生み出しているらしい。

考えるだけでぞっとする、嫌な世界だ。

親父もそうだが、家柄だのなんだの言い出すヤツはどうも好きになれない。

「でも、そのインナーだったらエッチ禁止ってことじゃないだろ」

湯浅の説明を聞きながら、更衣室で水着に着替え、俺は疑問を口にした。

「早乙女さんは別格だ」

「……まあ、確かに別格ではあるけどさ」

プールに出た途端、嫌でも女の子達の水着姿が飛び込んでくる。

みんな眩しい。

生の女子高校生の水着姿だ。この光景を見られるだけで、男子校から飛び出した甲斐があるってものだ。

そして、その中で一際輝いている美少女が一人。

もちろん早乙女さんだ。

黒い髪をまとめ、水泳帽に入れている。おかげで白いうなじが、光り輝いている。

何より、細く引き締まった体つきなもの、出る所はしっかりと出ている。制服姿は清楚としかいえない雰囲気だったが、水着姿になると清楚にして肉感的という、恐るべきポテンシャルを持っていた。

間違いない、別格だ。他の女の子とは、輝きが明らかに違う。

『お兄ちゃん！』

頭の中で、ゆなが叫んだ気がする。

俺は慌てて、男子達の集団に視線を移した。むっさい男共が、水着——海パン一丁で体



育座りをして、女子達を鼻の下を伸ばして見ている。

高ぶりだした心が、急速に冷えていく……。

「別格ねえ。俺にはそのあたりは、よく判断出来ないけどさ」

驚くべきことに、湯浅もまた輝く女子の水着姿を見ていない。

「早乙女さんが別格なのは違う理由さ」

「とうとう？」

「十珂グループが九つの中核企業とその子会社から成り立っているのは、知ってるか？」

小さい頃に何度も教えてもらった気がするが、正直忘れてる。この街を出てからは、必要な知識だったしなあ。

それでも辛うじて覚えている知識としては、数字を冠した九つの企業によってその中核が構成されているらしい。数字が大きいほど格上で、グループを仕切っているのは国枝銀行というらしい。

国枝に数字ないじゃん！ 初めて聞いた時にそう思ったが、昔は九荷枝くにえだって名字だったらしい。面倒なんで国枝に変わったのだとか。

「早乙女さんは、その中の早乙女林業のご令嬢ってわけだ。インナー連中にとっちゃ、プリンセスだな」

「早乙女って数字ないぞ？」

「五月の女でさおとめだったらしいぜ」

「そんなんばっかりか！」

「俺にキレるなよな。とにかくだ、そんなご令嬢だぜ。しかも校内に許嫁いいなせかけまでいるんだぜ。？」

「許嫁!？」

「そうさ。それも、かなり厄介なヤツがな。ま、だからさ、結婚するまで傷物にはならないな。そんなこととしてみる、騙した男は今頃……」

湯浅が自分の首を、両手で絞めてみせる。

手を付けただけで殺されるのか……。恐ろしい世界だ。

絶対に、絶対に俺は《悪瞳あくめ》を発動させるわけにはいかないらしい。騙すどころか、性欲ヒートアップ時にとんでもないことをさせかねない。

そんなことをしたら、命が幾つあっても足りたもんじゃない。

海パンの列に交ざって座りながら、俺は太陽を見上げた。

水泳の授業は——俺にとってただ耐える、辛く厳しい授業になるようだった。

※ ※ ※

水泳の授業は、まさに地獄だった。

キヤツキヤウフフしている水着姿の女子達を、俺は徹底的に避けた。絶対に見ようとし

なかった。その結果、俺の脳裏に焼き付いているのは、男子共の見たくもない体ばかりだ。

教室に戻って授業となっても気は休まらなかった。

夏なのだ。

水泳の後なのだ。

女子の背中には、白い布地に透けるブラジャーが……。

仄かな女の子の匂いが……。

俺は視界を狭くし、黒板を必死に睨み、ノートに集中した。授業だ。授業を聞くこと以外は、今の俺にとっては刺激が強すぎたのだ。

そんな耐久レースをなんとか終えて、へとへとになりながら俺は正門脇に立った。

世界中で唯一安心して接することが出来る女性、妹のゆなどの待ち合わせだ。

が、来ない。

五分、十分経っても出てこない。

夏の陽射しはまだまだ元気がいいで、汗が出ることこの上ない。

「にやろう……」

メールを打とうとスマホを取り出すと、丁度ゆなからメールが届いた。

『部活の紹介とかで拘束されちゃったの。ごめんさい、先に帰ってて！』

どうやら妹は、俺よりも遥かに青春をエンジョイしているらしい。

「はああああ」

虚しくため息を吐くと、鞆を肩に担いで俺は歩き出した。もちろん引越し作業が終

わっていない部屋にだ。

「こっちが家なの？」

凜とした声に、慌てて顔を上げる。すると、何故か隣を早乙女さんが歩いている。

「あ、ああ」

「妹さんは？」

「俺と違って、早くも人気者らしい。一緒には帰れないってさ」

「ふうん」

声を掛けてくるが、顔を向けてこない。

黒い飾り気のない鞆を両手で、腰の前で持って静かに歩くだけだ。

そのまま一分程、何も喋らずに歩いて、早乙女さんがチラリと恥ずかしそうに俺を見る。

「……なに？」

「おかしいことを聞いてもいい？」

「ゲイとかホモですか？ っの以外なら」

「あれ、違うんだ」

どんぴしゃでした！ 清楚な顔して、ホント酷いこと考えてやがったぞ！

「なんでそうなるんだよ！」

「だって、水泳の時間中、ずっと男子生徒の裸を追ってたでしょ？」  
 「あ、あれは、別に連中のすね毛くさい体なんて見たくはないけど、し、仕方なかったんだよ！」

「もしかして、女の子が怖いの？」

「え？」

「だって、女子の水着姿を見たくないから、男子を見てたってことでしょう？」

「参った。俺とは脳みその造りが違うらしい。あつという間に、だいたいの中間で止まった。もつとも、その原因までは分からないはずだが。」

「まあな。その……ええと、あれだ。女子だって、ジロジロ見られたくないだろう？」

「思いつきり嘘です。」

「とつとも見たいです。」

「好感度アップのために嘘を吐きました。」

「ふうん。そんな男の子もいるのね」

「あれ、意外にも大成功？」

「ちよっと感心したかな」

「本当に成功している。ちよっと心配になるチヨロさだぞ……。」

「そのまま仲良く同じ角を曲がり、早乙女さんがまた俺を見た。」

「千種くん、もしかしてインナー？」

「いや、違うけど」

「そうなんだ。こっちの街には、十珂グループの社員が多いから」

「へえ、知らなかったよ。お袋は福岡で全然関係ない会社に勤めてるんだ。俺と妹のゆなの二人だけで、こっちに引っ越して来たもんだからさ」

「二人だけで？ でも、どうして？」

「早乙女さんが、吃驚する。驚いた顔でも表情が浮かぶと、普段の綺麗さとは違う、可愛さが出てくる。」

「あー、いや、うん。ちよっとした因縁がさ」

「そうなの。お母様も随分と思いついたことをするのね。妹さん、心配でしょうね」

「そーだなあ。まあ、俺はこの街に少しは土地勘あるし、そんなに心配してないんじゃないかな」

「土地勘って……」

「早乙女さんが押し黙る。」

「数秒後、じっと俺を見つめてきた。」

「もしかして昔、住んでいたの？」

「ああ。小さい頃ね……。懐かしいな」

「女の子に見つめられる。なんて心地好い体験なんだろう。」

「その高揚感が、俺に小さい頃の記憶を思い起こさせてくる。そうとも、あの頃も俺は一

人の女の子に見つめられていた。

「そうそう。確か、この道の先に住んでいた子だ。懐かしいなあ、よく一緒にこの道を歩いたっけ。あの子、すぐに手を握りたがったっけ」

「……コーヘー」

「そうそう舌っ足らずで、妙に俺の名前を伸ばして呼んでくれたっけ」

「女の子は好きな男の子に、パンツを見せるもんだって教えてくれたわよね」

「ああ、そうだった、そうだった。そしたら、会う度に俺にパンツを見せて……パ、パンツ……え？」

恐る恐る横を向くと、早乙女さん——いや沙月が後方で立ち止まっている。

そうとも、俺の初恋の女の子であり、初めて欲情した女の子であり、初めて《悪瞳》した相手だ。

「沙月か！ 悪いっ、あんまり久しぶりですっかり忘れてた！ いやあ、なんだか引つかる名前だとは思ってたんだけどさ」

照れ隠しに頭を掻きながら俺は、目を瞬かせた。

沙月が地面を見下ろし、ワナワナと震えているではないか。

その姿に、幼い頃の記憶がまたも甦る。

俺の引つ越しが決まった日、こっそり会ったのだ。俺にパンツを見せようとする彼女のスカート俺は押さえ、告げたのだ。

「沙月、お前の好きは嘘だから」

当時まだ、《悪瞳刺魂繫呪》を漠然としか理解出来ていなかった俺の、精一杯の説明だ。

「ん……？」

初恋の男に騙されて、早乙女沙月は男嫌いになった。

そう聞いた。

あれ、もしかして騙した相手って俺ですか？

沙月がツカツカと歩いて来て、目の前で止まる。

「さ、沙月？」

恐る恐る声を掛けた瞬間だ。

# バツチイイイイイイイイイイン！

思いつきり、頬を引っぱたかれる。

それはもうスナップが利いた、百点満点の右平手打ちだ。

「いつてええええええっ！」

「よくも、よくもぬけぬけと帰ってきたわね、コーヘー！」

「ちょ、ちょっと待ってって沙月！」

「私のっ、この私の初恋を返してよね！ この私のパンツだって返してよ！」

「別にパンツは盗んでないだろ！」

「スカートめくりにだってあったことのない、私の秘蔵のパンツ姿よ！」

「まじか！」

「つてえええええつ、そっちじゃない！」

## バツチイイイイイイイイイイイイイイ！

左平手打ちが、今度は炸裂した。右手よりは、ちよつとだけ痛くない。

「知ってるのよっ。《悪瞳刺魂繫呪》っていう呪いの存在はっ。女の子の恋心を良いように弄び、あげくの果てに自分の汚らしい欲望の犠牲者にする、さっついてええの呪いを、コーヘーが持ってるって！」

「も、持ってるけど、当時は俺だってその存在をだ！」

「おかげでコーヘーは、私の初恋を奪うわ、初パンツを奪うわ……！」

沙月が拳をワナワナと握りしめる。

しかし沙月のヤツ、思いの外、パンツへの執着が強いな。

「いや、ほんとパンツは謝るって。当時の俺にとつて、女の子のスカートの中こそが目的だったんだよ」

「それだけで済ませる気！ コーヘーは、もっと酷いことをしたじゃないのっ。忘れたとは言わせないわよ！」

にじり寄り、超至近距離でキツと沙月が睨んでくる。

あんまりに近い。端から見たらキスシーンとかと間違えられ兼ねない距離だ。

「憶えてないわけ！」

「え、ええと……まさか、最後までしてはいないよな。小学校一年生だったし」

「ええと……なら、なんだ？」

「いっっ！」

ガシッと襟首を掴まれて、ねじり上げられてしまう。

「ぐ、ぐえ」

「この早乙女沙月を許嫁にしたのは、コーヘー自身でしょうが！」

「い、許嫁？」

そういえば、そんなことがあったようななかったような……。どっちにしろ、子供同士のたわいない戯れ言だろう。

「いっっ、私の両親は大喜びだったんだからねっ。周りに言いふらして、正式に許嫁の契約までコーヘーのお父さんとしたのよ！」

「ま、マジかよっ!?」

「マジもマジ、大マジよっ。そしたら『好きは嘘』とか言っつて、そのまま逃げ出すってどういうわけよ！」

「いや、あれはお袋と親父が喧嘩して……」

「いい、私はねっ。おかげで小一でいきなりバツイチよっ。周りから、許嫁に逃げられた傷物女って呼ばれてるんだからっ。分かるっ、この屈辱が！ しかも、その初恋が呪いで騙された偽の恋心って……こ、こんの腐れ外道、女の敵いいいい！」

ギリギリと真面目に締め上げてくる。

死ぬ、このままでは死んでしまう。

「ギ、ギブ、ギブアツだから」

必死に沙月の手首を叩く。

それでも十秒ほど締め上げてきて——ようやく解放してくれた。

空気が、空気がたまらなく美味しい。

ゼイゼイと息をしていると、地面にポツリと水滴が一つ落ちた。

雨かと思いい顔を上げ、俺は見ってしまった。沙月の瞳に溜まる涙を。

慌てて沙月が顔を上げ、太陽を向きながら目をごしごしと擦った。

「沙月、俺はそんなにお前を傷つけたのか？」

「コーヘーは嫌いよ」

「ああ」

「でも……アイツはもつと嫌い」

さっぱり分からない沙月の返答に、俺は瞬きすることしか出来なかった。そんな俺に、

沙月は絞り出すように言葉を紡ぐ。

「コーヘー、貴方のせいで私は………こ、このバカアアアアア！」

視界いっぱい、いきなり靴が現れた。

沙月が振り回した靴が顔面に衝突して、火花が飛び散る。

「あ、ごめん……」

ひっくり返った俺に、沙月が手を差し伸べてくる。

が、その手を握る直前に沙月が慌てて手を引込めてしまった。キョロキョロと周囲を見る。

「沙月？」

「と、とにかく、私は絶対に許さないからねっ」

そして大きく息を吸う。

「コーヘー！ 大っ嫌い！」

周囲に思いつき響き渡る大声で叫んだ。耳がキーンとなってる中、沙月は走って行ってしまった。

「いちいち……な、なんだったんだ、最後のは」

体を起こし、俺は首を捻った。

「そっういやアイツ、もう俺の呪いの影響はないってことなのか？」

どう考えても、今の一連の行動の中で求愛行動があったとは思えない。俺の欲望が表現

されているとは思えない。

平手打ち二回に、顔面痛打だ。

そんな性的欲求が俺にあるとすれば、ただのマゾだ。

「ふむ。あやつの魂にはもう《鬼神魂魄刀》がないようじゃな。つまり《悪瞳刺魂繫呪》からは解放されておる」

目の前に、いきなりお子様が現れた。

いや、ちびっこくなくてはいるが、狐耳といい妙な巫女装束といい――。

「もしかして、玉芽か？」

「当たり前ではないか。こんな可愛らしい少女が他におるか」

ちびっこい身なりに合わせ、残念ながらもなくなってしまった胸を反り返らせる。

「ゆなの方が可愛かったぞ」

「まさかお主、妹にまで手を出しておるのか？」

「純粋な可愛さの話だ！」

「妹バカじゃのお」

「うるせえ。そもそもなんで現れたんだよ」

「当たり前であろう。妾はお主に憑いておるのじゃ。お主が女難にまみれて苦しむのを樂しむためにな、フフ、フハハハハハハハハハ」

顎の下に手の甲を当てて、高飛車に笑う。神社で会った時のスタイルなら似合うのだろ

うけど、このお子様スタイルでやられても……ませたガキにしか見えない。

「フッ」

思わず鼻で笑ってしまった。

「な、なんじゃなんじゃ、そのバカにしたような目は！」

「バカにしてみただよっ」

「ぐぬぬぬぬ」

プライドを傷つけられたのか、ぶるぶる震え出した。

「てか、それよりだ。俺の前に現れたってことは、呪いの解き方を教えてくれるんだよなっ。あと沙月から《悪瞳》が消えてるってどういうことだよ！」

玉芽の両肩を逃がさないようにがっしりと掴む。

「ほう。霊体である妾を掴むか。そういや、妾のお尻も叩きおったな。あ、あれはなかなか凄かったのじゃ……」

扇子を取り出し、顔を隠す。

「なに顔を赤くしてんだよ」

「っ、つい思い出ただけじゃっ。くっ、そもそもお主、良いのか？」

「何が？」

「今のお主な、周囲からは変人にしか見えておらぬぞ」

「え？」

「フフフ、妾の姿はお主にしか見えておらぬからな。今のお主は一人で叫び、一人で暴れる、ただの変な人なのじゃ」

恐る恐る周囲を見渡す。

ヒソヒソと通行人達が話し合い、誰かがお巡りさんに電話を始めるところだった。

「……………し、失礼します!」

脱兎の如く、俺は部屋へ全力疾走だ。

「ハアツ、ハアツハアツ……………」

借りたマンションに辿り着いた時には、もう汗でグシヨグシヨだ。

「な、なんじゃお主、意外に足が…………ゲホオ、ゼ、ゼヒ、ゼヒ…………し、死ぬ…………」

何やら上から目線で言いかけた玉芽が、俺のズボンを掴んで崩れ落ちる。

「妖怪なんだから、走るんじゃなくて飛んだりすればいいだろうが」

玄関の鍵を開けて中に入る。すると当然のように玉芽がついてきた。

「ハアツハア…………長年寝てたせいでの、ゼイゼイ、どうも霊力が戻っておらぬ。おかげで、フウ、普段はこの姿が楽での」

「お姉さん姿は疲れるのか。てか、あっちは偽なのか」

「失礼なっ。妾が人間に化ける際は、あちらが順当じゃ。化ける霊力が足りてないせいで、こう、ちっちゃくなってるだけじゃ」

プリプリと怒りながら玄関でしゃがみ、雪駄のようなものを脱ぎ出す。

「何してるんだ?」

「土足厳禁じゃろう?」

「そうだけど、なんでウチに入るんだよ」

「お主の家じゃからな」

「だから入る必要ないだろ!」

「お主に憑いておるったじゃろうがっ——が、がぎやあああああ!?」  
いきなりひっくり返って悶絶し出した。

フンドシが丸見えだ。

「ふしぎな踊りで、俺のMPでも削ろうってか?」

呆れ果てた俺を、玉芽がつぶらな瞳で見上げてくる。

「あ、足が攀ったのじゃあ、助けて」

「あのなっ、なんで憑いてる妖怪を俺が助けなきゃならねえんだよ!」

「っ、憑いてるだけに攀った的な?」

…………玄関に、がっくりと膝を突いてしまった。

「抱腹絶倒じゃな」

「違うわいつ。呆れ返っただけだ」

仕方なく玉芽を、Amazonから来た荷物か何かのようにぞんざいに持ち上げ、リビングのソファに放り出す。



ほとんど床すれすれの背の低いソファで、前には同じく背の低いガラスの机が置いてある。全て選んだゆなの趣味で、フローリングと相まって小洒落ててクール？な感じらしい。もっとも、俺としては食事しづらいなあという……。

「なんじゃ、うら若き乙女をもう少し丁寧……ぬ、ふ、ふかふかじゃぞ!？」

ソファの上で玉芽がゴロゴロした。

狐というより、ほとんど子猫か何かみたいだ……。

「足はもういいのか？」

「なんとなく」

「適当な……」

汗でビショビショのシャツを脱いでTシャツに着替え、俺は冷蔵庫から麦茶を取り出した。

グビグビと飲むと、思いつきり癒やされる。

「ふうう、夏はやっぱり冷たい麦茶だな」

「なんじゃそれ、寄越せ」

ソファにひっくり返ったまま、玉芽が手を出す。

「……横柄な妖怪だな」

仕方なく、グラスに麦茶を入れて渡してやる。

すると両手でグラスを取り、ちびちびと飲み始めた。

「プハア、ふむ、甘露甘露」

「ただのバック麦茶だけだな。でだ、ここまでしてやったんだ。説明してもらおうか？」

「説明？」

「呪いの解き方と、さつき沙月が《悪瞳》から解放された理由だよ」

「おお、さつきの検非違使に捕まりかけた時の質問か」

検非違使って……平安時代のお巡りさんか。

「ふむ。ならば右脚のふくらはぎを揉むのじゃ」

「揉む？」

「撃って、実はまだ痛いじゃ」

そもそもなんで妖怪のくせに足が撃るんだよ！とか、妖怪って筋肉あるのか？とか、色々と文句はあるものの、ぐっと堪えて玉芽が投げ出した右脚ふくらはぎを揉んでやる。

「んにゅ、あっ、くうん……も、もそつと強くじゃあ、お、おとお、ん、そ、そう、いい、いい塩梅じゃあ、あんっ、あはあ♥」

子供姿のくせに、妙に艶めかしい反応をしゃがる。

「ふむ、揉み続けるのじゃぞ……んっ……そうそう、あの早乙女沙月とか言う女子じゃったな」

「そうだ。なんで《悪瞳》が解除されてたんだ？」

「距離と年月じゃ。《悪瞳刺魂繫呪》を掛けた際の、んっ、お主の欲情具合によって変わ

るが、一定以上の距離を五年から十年取っておれば、んおお……ふう、《悪瞳刺魂繫呪》  
 によって突き刺された《鬼神魂魄刀》は、掛けられた者の魂から抜け落ちるのじゃ」

「そうなのか……」

「うむうむ」

足を揉まれて気持ちいいのか、トロンとした顔で玉芽が頷く。

「なら、俺の呪いを解く方法は？」

「んっ……今のお主に教えても無駄じゃな」

「あ、あのな！」

「どう見ても条件が揃わぬ者に、んっ、教えてもむしろ酷と言うものじゃあ」

「そんなの分からないだろ！」

「フフ、そもそも妾はお主が女難で苦しむのを見るために、んっんっ、憑いておるのじゃぞ？　そう簡単に教えてなるものか」

ニヤニヤと笑いやる。

「ま、もっとも。気が向いたら教えてやるかも知れぬし、んっ、妾の機嫌を損ねぬこと  
 じゃなあ、うひよひよひよ」

「で、ためえっ！」

「口を動かす暇があれば、ほれ、もっと強く揉まぬか」

「くっそっ、分かったよっ。揉んでやるよっ、ふくらはぎでも太ももでも好きなだけな！」

グツと堪えて、足を揉む。

確かに今、玉芽の機嫌を損ねるわけにはいかない。呪いの元凶であり、解呪への近道が  
 コイツだ。逃げられでもしたら、全てがパーだ。

このバカをなだめすかして口を割るのを待ちつつ、同時に自分でも解呪の方法を探る。  
 それがベストの選択だろう。

「んっ、そう、そうじゃ、もっと奥まで、んっ、奥まで押し込むのじゃあ、んっ、あはあ  
 ん♥」

しかし、冷静に考えたらひどい姿だぞ、今の俺。女の子、それも十歳程度にしか見えな  
 い子に嬌声を上げさせているのだ。

この姿、絶対に誰かに見られるわけにはいかない。

間違はなく口――。

「ロリコン!?!」

ドサツと鞆が落ちる音がした。慌てて振り返ると、そこに居るのはゆなだ。

「お兄ちゃん、ロリコンだったのっ!?!　もしかして、ゆなのこともいつつもケダモノのよ  
 うな目で見てたのっ」

口を両手で覆ったゆなの顔が、青ざめる。

「いや、待てっ」

「ゆなのお風呂上がりのノーブラ姿を、涎を垂らして見てたのねっ。ああ、ゆながお風呂

から上がるといっつも自分の部屋に籠<sup>こも</sup>もると思ってたけど、溢<sup>あふ</sup>れ出す猷欲を一人慰めていたのね！」

「ちよっと待っていつ。ゆな、そんな言葉どこで覚えた！」

突っ込みに、ゆなが瞬<sup>まじ</sup>く間に普通の顔に戻って指摘してきた。

「お兄ちゃんの勉強机二段目の引き出し、黄色のバインダーの中のコレクション」  
悶絶だ。

「ああああ、俺の内緒のエロ小説挿絵集が！」

「お兄ちゃん、エッチな漫画とかは十八歳になってからだよ？」

「違います。小説は成年指定じゃないから買ってもいいんです」

「はああああ、コレがモテたいためにわざわざ転校までした兄の姿とは、ゆな、情けなくて涙が出るよ」

態<sup>わざ</sup>とらしくため息を吐いてから、ゆなが拾い上げた鞆を机の上に置き直した。

「で、その子は誰？ 童貞のお兄ちゃんに子供がいるとは思えないし」

「お前、今、しれっと凄<sup>すご</sup>いこと言っただろ」

「気のせいだよ」

ゆなが冷蔵庫から牛乳パックを取り出し、グラスに注ぐ。

だが兄は知っているのだ。

麦茶ではなく牛乳を飲む理由が、なかなか成長しないおっぱいを育てるためだとな！

「ぶっはあ……なにによ？」

睨<sup>にら</sup>まれてしまった。

「なんでもありません」

「ふ〜ん」

冷蔵庫に牛乳パックを戻して、ゆながグラスを台所に持って行く。その場ですぐ洗い流すのだ。

「で、誰なの？」

戻って来たゆなが、ソファに座った。そんなゆなを、玉芽<sup>たまめ</sup>がジロジロと見つめる。

「とうかお主、妻<sup>わらわ</sup>が見えるのか？」

「何言ってるの、この子。厨<sup>ちゆう</sup>二病？」

「いや、そうじゃなくて……ああ、俺の元凶だ」

「お兄ちゃんの元凶？ お父<sup>おとう</sup>さんじゃなくて？ そういえば、お父さんに連絡したら、お兄ちゃんはいらないけど、ゆなには逢<sup>あ</sup>いに来いって」

お袋は自分から親父<sup>おやじ</sup>を拒絶し、俺には親父が興味なく、ただゆなだけが親父と連絡を取り合う仲だ。おかげで最後に親父に会ってから、優<sup>やさ</sup>に三年は経<sup>た</sup>っている。

「そうじゃなくて、呪<sup>のろ</sup>いだ。《悪<sup>あく</sup>瞳<sup>とん</sup>刺<sup>し</sup>魂<sup>こん</sup>繫<sup>けい</sup>呪<sup>じゆ</sup>》を、ご先祖様に掛けて、延々と俺の代まで迷惑<sup>めいわく</sup>掛けてる元凶が、コイツだ」

「そう妾<sup>めかけ</sup>じゃ」

なぜか自慢げに胸を張りやがった。

「ええと、光基とかいう千年くらい前のご先祖様に呪いを掛けた妖怪だっけ？」

ゆなが思い出し思い出し口にする。

「うむ。確かに妾が光基のアホに《悪瞳刺魂繫呪》を掛けたのじゃ」

「大妖怪玉芽御前？」

玉芽を上から下まで見る。

「そうじゃ」

「このちびっ子が？」

俺を見た。その瞳には如実に「何言ってるの？ お兄ちゃんお疲れ？」的な、同情と哀

れみがほどよくミックスされた色が浮かんでいる。

「本当らしいぞ。何しろ玉芽神社で拾ったんだし」

「ひ、拾ったあ？ お主、妾をそこらの捨て猫か何かのように！」

玉芽が毛を逆立てる。

「似たようなもんだろ！ 一回拾われて逃げ出したくせに、勝手に家まで付いて来るとか、完全に捨て猫じゃねえか！」

「違うのじゃ違うのじゃつ。妾は狐なのじゃつ。偉大なる天狐なのじゃつ。野干でも化け猫でも狸でも、まして捨て猫でもないのじゃ！」

「と、本人は言ってるぞ？」

ゆなを見ると「ああっ」と手を拍った。

「可哀想な子なのね」

「失礼な——！！ 良からうつ、こうなったら妾が玉芽御前と恐れられた天狐である

と見せつけてやるのじゃ！」

玉芽がピョンツとガラステーブルの上に乗った。

瞬間、

「こらあつ、テーブルの上に乗っちゃダメでしょ！」

ゆなの雷が落ちた。

「ひやあああっ!」

玉芽が転がり落ちて、何故か俺の後ろに回り込んでくる。

「あ、あやつ、怖いのじゃ」

「大妖怪はどこ消えたよ……」

「お、おお……コホン、ゆ、ゆなさんとやら！」

相も変わらず俺の背後から、びくつきながら顔半分だけ出す。

「なに？」

「見るのじゃ、これを！」

「びしっと指差したのは、自分の耳だ。」

あつさりゆなが言うが、玉芽がフルフルと首を振る。

「触ってみるがよい。特別に許してつかわそう」

「む〜」

チラリと俺を見てきたので、軽く頷いてやる。それで安心したのか、ゆながそっと狐耳に手を伸ばした。

触る。

フアサア……。

「うわ、すごいフサフサしてて気持ちいいよ！」

「フフフ、じゃろう。これが百%天然毛皮の威力じゃ！」

「引っ張っても取れないのかな」

「え——ふんぎゃあああつ?!」

ゆなに容赦なく耳を引っ張られて、玉芽が酷い悲鳴を上げた。

「うわ、本物だ！」

「千切れたらどーするのじゃあああ」

耳をさすりながら、玉芽がゆなを睨む。そんな玉芽にゆながごめんごめんと笑い、ふと小首を傾げた。

「どうしたゆな？」

「うーん、天然毛皮なんでしょ、この玉芽ちゃん」

「ああ、そうだな」

俺の背後で「ちゃ、ちゃん……」と玉芽が呻いているが無視しよう。

「ってことはさ、ダニとか平気なのかな。捨て猫はまずそーいうところを気にしないとだよ」

「だから捨て猫じゃないのじゃ——！」

悲痛な叫びが、リビングに上がったのだった。

※ ※ ※

「で、なんでお前までウチで夕飯喰ってるんだ？」

ゆなが作ったカツカレー——というカレトルト甘口カレーにカツを入れただけ——を必死にカツ食らっていた玉芽が、キョトンとした顔を上げる。

「ふあにが、ふあふあふいひいか？」

「飲み込んでから喋れよ……」

素直に玉芽がゴクンと飲み込む。

「何かおかしいか？」

「おかしいだらっ。その一！」

人差し指を立てて、玉芽に見せつける。

「お前はウチの家族じゃない！」  
 「ふむ。じゃが、お主の先祖には世話になったし、何よりお主に憑よいている妖怪じゃ。家族みたいなもんじゃろ」

全く理屈になっっていない理屈を堂々と言いやる。

「じゃあその二だ！」

人差し指に続いて中指を立てる。

「妖怪がなんで飯喰くってるんだよ！」

「なっ、じゃあ何かっ、お主、妖怪は餓死しろとでも言うのか！」

「いやいやいや、普通妖怪ってのはそこの人間の生気を吸い取るとか、なんかこう、もっとファンタジックな方法で食事を取るんじゃないのか！」

「夜な夜な、人間を襲かって喰くえと言いうのか？」

「なんでホラーになるんだよ！」

ホラーが苦手なゆなが、ちよつと引いちゃってるじゃないか。

「安心せい。妾は人肉なんぞ喰くったことも喰くうつもりもないわ。グルメというヤツなのじゃ」

「じゃ、なくてだな」

「まあ、その気になれば玉藻御前たまものように、人間と交合して、その生命力を吸い取ること出来るはずじゃが、ふむ、いかんせん妾はまだ未経験じゃしなあ」

「交合ってなに、お兄ちゃん？」

ホラーな展開にならないと知ったゆなが、ほっとした顔で聞いてきた。

「知らん」

「なんじゃ知識のない連中だな。交合とは、男女のまぐわいじゃ。子作りと言いった方が分かりやすいかの」

「ああ、セックスのことか——じゃねえっ、てめえっ、食事中になんてこと言い出しやる！」

思わず椅子いすを蹴けって立ち上がり、玉芽を睨み付けた。すると玉芽も立ち上がり、睨にらんでくる。

「なんじゃ、聞いたのはお主じゃろうが！」

「ウチにはな、ゆなっという中学生がいるんだぞっ。お前みたいな汚れ耳年増みみとしになったらどうしてくれる！」

「うるさい、女好き童貞めっ。そんなんだから、コーヘー大嫌きらいとか言いわれて、鞆たもとで殴なぐられるのじゃ！」

「ああっ、けっこうショックだから忘れようとしていたことを！」

カツカレーの上で視線が衝突する。すると、ゆながいきなり納得したように口を開いた。「うーんと、つまり。玉芽ちゃんは、処女だし、相手もないからカレーを食べないといけないってことね」

「しよ、しよよ……相手いない……」  
 がっくりと玉芽が席に崩れ落ちる。

「その通りじゃあ……その通りなのじゃあ、妾は一人だから、お主らのカレーとやらを喰ってるのじゃあ……」

泣きながら食べ始めた。

さすがにちよつと可哀想な気が……。

「ぐづ、美味しいのじゃあ。こんな食べ物、妾は初めてじゃあ……。ゆなは天才庖丁<sup>ほしらまう</sup>人なのじゃあ」

もりもりと食べていく。

「天才って、引越したばっかりでまだ調理器具段ボールだもん。今日のはレトルトに、お肉屋さんで値引きしてもらったカツだよ？」

ゆなが苦笑する。ゆなの言う通り、部屋のうちにはまだ未開封の段ボールが転がっている。これらが全て整理されるのは……きつと次の土日だろう。

「てか、このカツ値引きなのか？」

「うん。家族分まで料理しなきゃいけないんだーってニッコリ微笑<sup>ほほえ</sup>むとね」

ゆながニコニコと明るい笑顔を浮かべ、一転、ニタアと口元<sup>くちが</sup>を歪める。

「フフ、たいていのオジサンは値引きしてくれるんだよ」

「お前ってヤツは……頼もしい妹だな、本当に」

未恐ろしさを感じつつ、とりあえず褒めることにした。すると、あっさりゆなが照れ笑いを浮かべる。

「えへへへ」

少々、社会の厳しさで汚れていても、この兄には素直で純真なのだ。それ以外に、何がいるだろうか。いや、いらなない！

「ところでお兄ちゃん？」

そんな愛すべきゆなが、スプーンを置いて俺を見つめてきた。

「なんだ、妹よ」

「コーヘー、大嫌いってなに？」

グサリ。

「どういうことなの？」

「あ、いや、その……俺も、よく分からないって言うか？」

「よく分からない程度のこと、鞆で殴られたりしないよ、普通」

「そ、そう言われましても」

「何か、女の子とトラブル起こしてないよね？」

鋭い。俺とは違い、ゆなの頭の回転はやはり一級品だ。

「早乙女沙月<sup>さくわめ</sup>とか言っておったな」

玉芽が、いきなり言葉を挟み込んできた。

「あ、こらー！」  
 「お主に初恋を弄もよぼばれて、スカートの中身を見られたとか、そう言っておったな」

「あ、あ、おあああああああ」  
 思わず頭を抱えて、俺は机に突っ伏した。そしてチラリとゆなを見てみる。  
 はっはーんって顔してた。

「ああ、あーあー、お兄ちゃんが最初に《悪瞳あくめ》して恋心を弄んだ人ね。へえ、沙月さん  
 かあ。まさか、学校で最初に会った人が、そうだったなんて、なんか運命だよねえ」

「そ、そうですかね」

「でもまあ、顔見ても思い出さないし、名前聞いても思い出さないとか、ホント最低だね、  
 お兄ちゃん」

ジロリと睨にらまれた。

「うぐっ」

「沙月さんは仕方ないよ？ だってお兄ちゃんもゆなも、名字変わってるもん。でもねえ、  
 沙月さんは変わってないんでしょ？」

「変わって……ません」

「しかも、お兄ちゃんにとっても初恋なんだよね？」

「ほう？」

ゆなの言葉に、玉芽がニヤリと笑う。ものすごく、聞かれちゃいけない相手に聞かれた

気がするぞ……。

するとゆなが、深い深いため息を吐いた。

「はあああ、モテないはずだよお兄ちゃん」

その言葉が、思いつきり俺の心をえぐる。思わず、椅子からずり落ちかけたほどだ。

「妹よ、兄に対してそういう直球表現はどうかと思うぞ……」

「事実だもん」

椅子から落ちました。

「でもまあ、不幸中の幸いかな」

「な、何がだ……」

椅子に這は上がりながら、俺はゆなを見た。

「もちろん、《悪瞳あくめ》したりしなかったこと。いい、お兄ちゃん。初恋の相手に、また恥ずかしい思いをさせたくなかったら、沙月さんにはあまり近づかないこと。分かった？」

「ああ、そうだな」

ゆなの言葉に俺は頷うなずいた。そうだった、二度も沙月を傷つけるわけにはいかない。

「ま、大嫌いなコーヘーじゃかな。近づきたくとも、避けられるのがオチじゃオチ」

人の不幸を笑う、不幸の元凶から、俺はカツカレーのカツの最後の一切れを没収してやっつた。なにしろジューシーでとても美味しいカツなのだ。

そして玉芽が、暫しばらくく固こまった後、号泣しながら抗議してきたのだった……。




 第三章


 あの子とアクメ

転校二日目の朝だ。

玉芽は、気に入ったらしいソファでいびきと共に寝ていたので、捨て置いて俺は登校した。

教室の席に着くと隣の沙月がチラリと俺を見た後に、プイッとそっぽを向いてしまった。どうやら、大っ嫌いって言うのは本当らしい……。初恋相手だけに、やっぱりショックだ。

「……はあ」

ため息を一つ吐いてから、机の中にノートと教科書をしまう。

ちょっと沙月を見ると、顎あごに手を当てて逆側を見ている……。ツンとした顎といい、サラサラの黒髪といい、夏の一服の清涼剤に思える。

小さい時には、こんなに美人になるとは思いもしなかった。

今思うと、そのスカートの中を毎日のように見ていたのだから贅ぜい沢たくな話だ。

まあもともと、その相手であった俺は……。全く、美男子にはならなかったのだが。

やっぱり「はあ」とため息が出てしまう。

と——ガラリと勢いよく出入り口が開いて、十人ほどの生徒を引き連れた茶髪をかつちりとセツトした男が入ってきた。

見忘れるわけもない。転校初日に俺とゆなを庶民庶民と散々バカにしてくれた、三ツ矢徹とあだ。高級外車に乗って登校し、十人近い取り巻きを引き連れ、いきなり授業をサボったヤツだ。そして、関かかわり合うと面倒だと沙月に忠告してもらった相手だ、

入って来た瞬間に多くの生徒が愛想笑いをする。どうやら金持ちな上に学校でも権力があるようだ。

「目を付けられないようにしましょう」

瞬く間に俺は沙月の忠告に従う決意をした。

ああいう家柄バカは大嫌いだ。家の力を自分の力にするとか、俺の美意識に反するにも程がある。

あるが、だ。金持ちで取り巻きがいるとか、一回因縁を付けられたら、もうずっと虐められるに決まっている。ひっそりと目立たないように、目を付けられないようにするに限る。今の俺は、しがない小市民なのだ。平穩、平和、平凡、これが重要だ。

「いいかな」

そのいけ好かない男が、先生でもないのに黒板の前に、さも当然と立った。改めて見ると、百八十センチに僅わずかかに届かない程度だろうか、顔がいいだけではなくて背も高い。

ものすごい格差を感じてしまう……。

「あいつ三ツ矢徹ってんだよ。十珂グループ中核九企業の一つ三ツ矢電機の御曹司さ」  
前の席の湯浅が、振り返って俺に教えてくれる。

なるほど、やっぱり俺の想像通り、いけ好かないヤツだった。ああいう、両親の力とか権威を躊躇無く使う人間にだけはなりたくない。かつこわるいことこの上ない。

「ああやってインナーをいっつも引き連れててさ、傍若無人っていうか、イヤミなヤツだろ？ しかもだ、アイツが——」

「いや、あまり興味ないしなあ」

でも目を付けられたくないの、返答は誤魔化しておいた。あんないけ好かないヤツには、名前も覚えられたくない。

「千種、千種光平、ちょっと前まで出てきてもらおうか」

「そうそう、こうなりかねないし。」

「なんでっ!？」

思わず叫んでしまった。教室にいる生徒達、全員が注目だ。

「あ、あと、いや、俺が千種ですけど」

同級生相手なのに、先輩相手にするような態度で俺は立ち上がった。

視界にふと入った沙月の顔が、真っ青になっている。

沙月もまた、十珂グループ中核九企業の一つ早乙女林業のご令嬢だ。転校初日の会話からしても、三ツ矢徹という男をよく知っているのだろう。つまり、そんな沙月が真っ青に



なるほど、ヤバイ相手ってことですか!?

剣術をやってきたから、腕に覚えがなくはないけど……叩きのめしたらのめしたで、大人の権力によって面倒なことになるのは、目に見えている。ここはひたすら頭を下げるしかないのだろう。全ては我慢だ。忍耐だ。三ツ矢のようなヤツの理不尽に耐えること、それもまた平穏平和平凡な庶民生活を守るために、必要なことだ。

まあ、正直憂鬱だけだ。

「早く前に出てこい!」

がっくり項垂れてるところに、容赦なく催促が飛んで来た。仕方なく、重い足取りで俺は前に進み出る。

しかし、何が気に入くないののだろうか。転校初日のことだろうか。いや、あれはあの場で片が付いているはずだ。それ以降、会っていない。目を付けられるはずがないんだけど……。まさかさっきの湯浅の言葉のせいだろうか。いやいや、あれは誤魔化ししたし。ぐるぐると頭の中で考えている間に、黒板に着いてしまった。

「校長室への案内程度は許してやったが、いい度胸だね」

三ツ矢が言う。度胸も何も呼んだのはそっちだろうと。

「何かな?」

「い、いえ、なんでも。その、ご用件はなんでしょうか?」

百七十三センチの俺と、百八十近い三ツ矢の身長差もあるが、精神的にも思いつきり下

から伺ってしまった。

「一つ聞くが、キミ、昨日は沙月と二人で帰ったようだね」

「はあ、そうですか」

俺が答えると、三ツ矢がやれやれと額に手を当てながら頭を振った。

「キミ、それがどういう意味か分かっているのかい?」

「分かっているも何も、たまたま偶然で」

「その割には随分と親しげだったそうだね」

なんでそんなことコイツは知ってるんだらうか。もしかして、ストーカー!?

とか言ったら怒られそうなので、ぐっと堪える。

「昔、ちよつと会ったことがあります」

「キミのような庶民が、十珂グループ中核九大企業の一つ早乙女林業の沙月と会ったことがあるだって?」

庶民と来たよ。しかも長ったらしく、《大》まで付けて沙月を飾り立てるし……。

「ええ、まあ、本当に偶然といえますか」

「その偶然にキミは海よりも深く山よりも高く感謝することだね」

「……ソウシマス」

まともに答えるのもバカらしくなって来た。なんで三ツ矢ごときに——いやいや、俺はただの庶民だ。それでいい。

「そんな庶民のキミには分からない感覚だろうけどね」  
「ソウデショウネ」

もうただ頷くだけの機械になろう。

「沙月はね、この僕様の――」

「僕様!？」

いきなり機械の心が壊された。いくら何でも一人称に《僕様》はないだろう。なんで僕に様を付ける必要があるんだ？

「なにかな？」

「あ、いえ、なんでもありません。ぼ、ボクサーって聞こえたので、何かなあと」

「ふんっ。僕様だ。この三ツ矢徹のことだ」

「ソウデシタ」

再び心を閉じる。

「いいかい、沙月はね、この僕様の婚約者なんだよ、分かるかい？」

「婚約者あ!？」

瞬く間にこじ開けられた。そういえば、湯浅が沙月には厄介な許嫁がいるって言うっていたけど、そうか、こいつか。確かに厄介だ。

「そうとも、婚約者さ。これはね、十珂グループとしても大きな意義のあることなんだよ。この僕様と沙月が婚約し、結婚することで、三ツ矢家と早乙女家が繋がりグループの結束

がまた一段と強くなるってわけだ」

そこで一度言葉を句切り、俺を冷たい目で見る。そう言われてもね。宗家でもなんでもない、下から三番目の家の結婚が、そんなに重要なのかと。

「ま、インナーですらない庶民のキミには分からない世界だろうけどね」

カチンと来た。コイツ、本当に最低最悪野郎だ。ここまで甘やかされて育つとか、どんだけお坊ちゃんなんだ。

三ツ矢家とか別にお前が作ったわけじゃないし、たまたまその家に生まれただけだし。なに自分の手柄とか実力ぶってんだ。

バカじゃないのか、こいつ。

……でも飲み込む。

今ここで揉め事を起こして、金毛学園で肩身の狭い思いをするわけにはいかない。何しろココは、呪いを解いた後に俺が、バラ色のハッピー学園生活を送る予定の場所なのだ。何しろ男女比率はほぼ五対五。男子校では絶対にあり得ない、楽しい青春が待っているのだ。

絶対に追い出されたくはない!

「あーつまり、俺に悪い虫になるなってことですね?」

「その通りさ。まあ、確かに」

三ツ矢がジロジロと俺を見てくる。男に観察されて、とても気持ちが悪い。

「キミのような男に、沙月の心が動くとも思えないけどね」  
 だったら因縁を付けるな！  
 いや待てよ。

もしかしてコイツ、自信がないんじゃないだろうか。沙月との関係があまり上手くいってないとか……。だから手当たり次第、沙月と仲良くなりそうなヤツに因縁を付けている。そう考えれば、沙月の男嫌いも理解出来る。

もちろん俺が散々スカートめくらせたり《悪腫》で恋心を弄んだ——わざとじゃないこともあるだろう。

でも、沙月に近づいた男性がみんな三ツ矢に因縁を付けられていたら、どうだろう。俺が知っていた沙月なら、きっと自分から男性達を守るために壁を作ってしまうはずだ。

自分が、男性を近づけなければ、因縁を付けられることもないのだ。  
 だから沙月は男嫌いのフリをしている——かも知れない。  
 ほんと、家だのなんだのと関わりと、面倒この上ない。

「何かな？」

三ツ矢が、考え込んだ俺に苛立った声を出した。

「あ、いやいや、気をつけようと思って」

誤魔化しながら俺は三ツ矢をよく見た。

造形はいいが、どうにも腹立たしい顔に見えてくる。

話は終わりと、取り巻きに三ツ矢の前から追い払われる。

ぞろぞろと子分を引き連れるって神経も最低だ。

こんなのと婚約する羽目になった沙月に、正直同情した俺だった。  
 と言って、今の俺、千種光平では何が出来るわけでもないのだが。

※ ※ ※

一日の授業を終えるチャイムが、古式ゆかしくキンコンカンコンと鳴り響いていく。

背もたれに体を預けて、ゆっくりと伸びる。

まだ二日目だが、男女共学の学校で女の子をあまり意識しないで生活するというのは、意外に難しいことがよおおおおく分かった。

まず夏服がけしからん。

白い制服の背中に、うっすらとブラジャーのラインが見えるのだ。しかも、妙に色気つきやがって赤いラインとかピンクのラインとかチラホラと拝見する。

とても嬉しい。

ではなくて、俺の観察によればクラスの女子十五人中、赤いブラジャーが三人、ピンクと思しきが二人、そして黒いブラジャーが一人いた。

なんて怪しからん環境だろうか。

授業そっちのけで集計を取ってしまった。明日もまた集計して、女子高生の下着のチョイスの基準を研究してみてもいいかも知れない。

ちなみに隣の席の沙月は、立った時に見たけれど、どうも白いブラジャーのようだ。

他にも、椅子に座ったり立ったりするだけで、短いスカートがチラチラと揺れて白い太ももが視界に飛び込んでくる。

なんて嫌しう苦しい環境だろうか。

もっとも、《悪隣刺魂繫呪》は目と目が合わなければ発動しないので、今のところは事なきを得ている。

が、この過酷な環境ではあまり自信が持てない……。この呪いさえなければ、男女比率五対五の上に美人率が高いこの学園はまさにパラダイスだというのに。

「よし、神社にも行って解呪の手がかりを調べるか」

視線を女子の背中とお尻から戻して、下校支度を始める。

と、隣の席の沙月がまるで俺の動きに呼応するように、慌ててスクツと立ち上がりかなり早足で教室を出て行く。

急いでいる様子だ。

なるほど、また帰り道に俺と鉢合わせしないようにか。教室であれだけ三ツ矢に因縁を付けられたのだ。沙月は沙月でこれ以上、俺に被害が及ばないように気にしてくれている

んだろう。

鞆で叩かれた上に大嫌いと言われたが、少しは気を遣ってくれているらしい。そこには

感謝だ。

「さてと、俺も帰るか」

鞆を肩に担いで、席を立つ。正門でゆなが待っているはずだ。もっとも、昨日のようにドタキャンの可能性も高そうだけど。何しろ、俺と違って社交性もある妹だ。

「帰るのか、じゃあな」

湯浅が同時に立ち上がった。

「お前は？」

「俺は部活だよ」

「野球とかサッカーか？」

「なんで運動部限定なんだよ」

湯浅が苦笑する。

いやでも、引き締まった体つきは運動部としか思えない。

「ちょっと特殊な部活さ」

湯浅はそれだけ言うと、廊下を逆方向に歩いて行った。

「ふうん」

湯浅の部活に、特に興味があるわけでもない。俺もまた素直に下駄箱へと向かう。

靴を履き替え、正門に向かう。

何度見ても大きな大きな正門の門柱に、今日はすっかりゆながいる。

「玉芽神社に寄ろうと思うけど、お前、どうする？」

と、ゆなが腕を組んでうんと唸った。

「どうした、妹よ」

「ゆなは、自分の兄を信じていいかどうか、とっても悩んでいるのです」

「あのな、そういうこと面と向かって言うなよ。兄は傷つぞぞ」

チラリと俺を見る。

「基本的には信じてるよ？ 優しいというか人が良いし、嘘は吐かないし、人を騙したりはしないし、かっこ、エッチな本をのぞく、かっこ閉じる」

「……学校でばらさないでもいいだろ！」

下校する生徒の失笑が数個、確かに聞こえたのだ。

「男子高校生だよ？ エッチな本を隠してない方が不健全だよ」

「そ、そういうものかな」

女子中学生に悟ったように言われてしまった。

「でもね。こと女の子の問題に関してはなあ。アレがあるし、信用していいかどうか悩むんだよね」

「あのな。俺の鋼の精神力を信じてくれよ」

「……だってお兄ちゃん、むっつりなんだもん」

ズバリ言いやがった。

「し、ししし、失敬な」

「そう？ だって、どうせ教室で女子生徒の背中見て、ニヤニヤしてたんじゃないの？」

お前は俺か、妹よ！

「あ、言葉に詰まった。凶星なんだ」

「……………だって、だって、生ブラジャーって妹とお袋のしか見たことなくて」  
涙ぐんでしまった。

「よしよし、妹ので良かったらいつでも見せてあげるからね」

「うん、ありがと——って、ダメだろ、それ！」

「エへ♥」

両頬に人差し指を当てて、可愛く首を二十度ほど傾けやがった。

しかし、この妹が何を考えているか、ホントよく分からない。同じ呪いの家系のせいかわい、  
《悪瞳刺魂繫呪》はゆなには効果が無い。

魂に突き刺さる《鬼神魂魄刀》が、刺さらないのだ。

そのせいで、何度も何度も妹に欲情しちゃっているが、一度もやばいことにはなっていない。  
それを知っているのか、ゆなは何かと俺を弄るのだ……なんかエッチな方向で。

「ま、いいや。昨日のこともあるし、さすがの兄も我慢出来るかな」  
ゆなが、うんと頷く。

「昨日のことって何だ？」

「うーん、それは行ってみてのお楽しみかな」

「行ってみるって、なんだよ。誰か俺を呼び出してるのか？」

「うん。お兄ちゃんが丁度行こうと思っていた、玉芽神社で待ってるって」

「誰が？」

「うーん、すごい美人さんかな」

「よし、行こう」

即断即決だ。男はそうであらねばならぬ。大いなる一步を、俺は踏み出した。

「いい、絶対に欲情しちゃダメだからね？」

「妹よ、兄を信じろ。まずはプラトニックから、ちゃんと始めてみせる！」

振り返り、ニツと笑いながら親指を立ててサムズアップだ。

「……………妹は、ものすごく不安です」

何か聞こえた気がするが、俺は無視して玉芽神社に向かった。

待たせてはいけないという、俺の優しい心のせいとか、歩みはやがて早足になり、ジョギングになり、短距離走になっていった。

境内に続く参道の階段を駆け上がり、剣術鍛錬のおかげか、見事に走り抜けることが出

来た。

もつとも、さすがに上り切ったところで、膝に手を突いて肩で息をしよう。

そもそも制服が汗でぐっしょりだ。ビショビショと言ってもいい。

「って、あああああ、何やってんだ俺！」

思わず頭を抱えてしまう。

だって、美人が待ってるって言うのに、汗臭さ百二十%だ！

ファーストインパクト最低です。

「くっそっ、ここに来てなんという戦術ミスだっ」

「なに一人で遊んでるのよ」

「遊んでなどいないっ。戦は戦場に赴くまでで決しているんだ。かの武田信玄公も仰つて  
いるんだぞっ。つまり、恋愛は始める前の準備が大事なんだ」

「ますます何を言っているか分からないんだけど……。そもそも、なんで恋愛の話に武田  
信玄なのよ」

「いや、ノリで……ん？」

聞き覚えのある声に顔をあげると、沙月が腕を組んで俺を見下ろしている。

「あれ、沙月？　なんでここに？」

「なんでって、ゆなさんから聞いて来たんでしょ？」

「ああ、ゆなのヤツが美人が俺を呼んでるって……ああ」



沙月が、喜ぶ様子でもなく淡々と言う。

「なら、私のことで間違いないわね」

「自分で認めるか、普通？」

「事実だもの、仕方ないでしょう？」

全く悪びれる様子がなく、思わず苦笑してしまった。もっとも、俺も沙月が美人だという意見には賛成ではある。

「ま、確かに美人だな」

「……………面と向かって言わないでよね」

横を向いてしまった。

何か機嫌を損ねたんだろうか。理由が全く思い付かない。仕方ないので、とりあえず誤魔化し半分で本筋の用件を沙月に聞くことにする。

「あー、で、俺を呼び出して何の用だよ。沙月と一緒にいると、また三ツ矢に因縁付けられるんだからさ」

「そのことよ。そのことで、謝ろうと思ったのよ」

「謝る？」

「ええ。私に関わったばっかりに、嫌な思いをしたでしょう？」

「そりゃ、良い気分じゃなかったけど」

「コーヘーのこと思い出して、つつい親しく話しちゃったから…………」

親しく？

昨日の記憶を思い返してみる。

怒られた、いや糾弾された記憶しかないんだけど…………。

「時々、三ツ矢徹は私に尾行を付けてるんだけど、運悪く昨日もいたのよ。途中で気が付いて、仲が悪いって見せようと思ったのだけど」

「ああ、だから大っ嫌いって叫んだのか。ん？ってことは」

「安心して、本当に大っ嫌いだから」

きっぱりと断じられてしまった。

「昨日の一件で、コーヘーは三ツ矢徹に完全に目を付けられたわ。ごめんね、油断した」

「しかし、尾行とか他の男に因縁付けるとか、最低野郎だな三ツ矢ってヤツ」

そこまで言って、俺ははたと気が付いた。最低野郎でも、沙月の婚約者なのだ。慌てて頭を下げる。

「わ、悪い。沙月の相手なのに悪口言った」

コツンと頭が軽く叩かれ、沙月の声が降ってくる。

「構わないわよ。事実だから」

その予想外の返答に驚いて顔を上げようとしたが、なぜか頭をガシツと、上がらないように押さえられてしまう。

「沙月？」  
「ちよっと待って」

「あ、ああ？」

三十秒ほど頭を押さえられただろうか。沙月の手がどいて、俺は顔を上げた。特に変わらない沙月の姿がそこにある。

「なんだったんだ？」

「別に」

素っ気ない答えだ。

「まあいいけど……」

釈然としないが、それほど根掘り葉掘り聞く気もない。

「しかし、今日は尾行はいないのか？」

境内を見回す。相も変わらずオンボロ神社だ。神主さんの気配すらない。

「いなかったと思う。それに」

沙月が言葉を切った。

「それに？」

「コーヘー、ホントに忘れまくってるのね、昔のこと」

「この街にいた頃のか？ そりゃまあ、小学校一年までだからなあ。それに、お袋が話しながらないから、家だとこの街とかあの頃の話題はタブーなんだよ」

「おじ様とおば様、喧嘩別れだものね」

沙月の申し訳なさそうな顔に、俺は笑った。

「気にするな、事実だからな」

「うん。でも、なら仕方ないか。三ツ矢もそうだけど、十珂グループの人間、特に中核九企業のオーナーである九家の人間は、この玉芽神社には足を踏み入れれないのよ」

「あ、そーなんだ。でも、なら沙月は？」

「あのね、嫌がる私をしょっちゅうここに連れ込んだのはコーヘーでしょうが。おかげで、忌避感なんて麻痺しちゃったわよ」

「……ああっ、スカートめくったのってほとんどココ——」

目を吊り上げた、鋭すぎる視線を感じして、俺は言葉を飲み込んだ。

「思い出させないでよねっ。とにかく、ここなら安全ってわけよ」

「な、なるほど……。てかさ、メールとかスマホのアプリとかで伝えるわけにはいかなかったのか？ アドレス教えてくれれば登録したのに」

「ダメよ」

「なんで？」

「定期的に三ツ矢徹に、私のスマホオチエックされるから」

沙月は何を言ったのか、一瞬分からなくて俺は固まってしまった。心の中で一言一句並べてようやく理解出来たが、信じられない。

「本当よ？」  
俺の様子に、沙月が苦笑する。

「三ツ矢徹つてのは、要するにそういう男なのよ」

「いや、待て……」

左掌を沙月の眼前に突きだし右人差し指を額にあて、俺は考える。

「そもそもだ、そうだ、そもそも見せなきゃいいだろ。拒否れよ！」

すると沙月が、視線を空へと投げて肩をすくめる。空はいつの間にか、黒く厚い雲が立ち込め始めていて、今にも泣き出してしまいそうだ。

「色々と事情があるのよ」

沙月が空、いや雲を見ながら呟いた。

すると、声に誘われたようにポツポツと雨が落ちてくる。

事情を聞いてもいいものかどうか悩むが、まずは雨宿りだ。

「沙月、傘ないだろ？ とにかく、社殿に行こうぜ」

俺の言葉に、沙月が軽く頷いた。

走り出し、十メートルほどで俺はピタリと立ち止まる。だって、こういうのはレディーファーストだ。

一人で先に行ってしまうのは、なんかかっこわるい。

「どうしたの？」

追いついてきた沙月が、不思議そうに俺を見る。

「いや、なんでもないよ」

肩をすくめて、また走り出す。今度は速度を調整して、並走だ。

雨脚は、そんな十数秒でさらに強くなってきている。もうほとんど土砂降りだ。

「凄い降りになってきたわね」

「ああ、急ごう」

「うん」

後ほもう無言で走り、並んで社殿の軒下に飛び込んだ。

ポロポロの賽銭箱を回って、縁側に上がる。

ピチョンピチョンと音が聞こえてくるところからすると、社殿の中はしっかり雨漏りしているらしい……。

「ホント、オンポロ神社だよな」

苦笑しながら隣の沙月を見て、俺は慌てて顔を背けた。

だって濡れているのだ。当たり前だけど、しっかり沙月が濡れている。

長い黒髪は濡れて、体にべたりと巻き付いている。

シャツもぐっしりよりで、肌に張り付き、俺に白い肌色を薄く教えてくれるのだ。

慌てて顔を背けたおかげで、残念ながらブラジャーは確認出来なかったけど、これ、絶

というか——チラリと見る。  
首に張り付いた濡れた髪の毛の間に垣間見えるうなじが、なんとというか、とてもとって  
も、グレートに素晴らしい気がする。  
って、いかん。

これはものすごく危ない気がする。

間違いない、俺は今、沙月に欲情している。少しでも視線が合えば、沙月を《悪瞳刺魂  
繫呪》してしまうかも知れない。

それは、とてもまずい。

落ち着け、ええと、ヒッヒッフーって呼吸方法だったっけか。

「ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

「なんでいきなりラマーズ呼吸法なんて、やってるのよ？」

呆れ返った声が飛んできた。

「え、ラマーズ？」

「そうよ。女性が出産する時にする呼吸法じゃない。妊娠してない、というか男のコー  
ヘーには一生縁がないと思うんだけど」

「まあ、うん、逆立ちしたって産めないもん」

「……なに、産みたいの？ やっぱり、ホモ？」

「なんでそーなんだよ！」

突っ込みつつ振り返りそうになって、慌ててまた顔を戻す。そんな俺に、沙月がクスリ  
と笑う。

「冗談よ、冗談。でも、コーヘー」

「なんだよ」

「貴方まで、こんなに濡れることなかったのよ？」

「そんなこと言ったって、一緒にいたんだから、そりゃ濡れるだろ」

「あら、私に気が付かなかったと思うの？」

「え？」

「コーヘー、さっき止まったの、私を待ったからでしょ？」

「づっ」

「さらに、私の足に合わせて走った。でしよう？」

「……………はい」

なんだか叱られてる気分で、頭を下げてしまった。もちろん、沙月を見ないでだ。

「怒ってるんじゃないってば。ただ、コーヘーの足なら、そんなに濡れないで来られたの  
にって思っただけよ」

顔が見えていないけど、どうやら苦笑したらしい。

ただ、それで沙月の話は終わったらしい。

と言って、俺も別に話すことはないわけで……。

なんともいえない、微妙な沈黙が流れ出してしまふ。ザーザーと降る雨の音だけが耳に入ってくる。いや、時折ピヨンピヨンと雨漏りの音もアクセントとして入ってくる。

気が付けば、雨漏りのタイミングを計ることに、逃避している俺がいた。もちろん、沈黙の気まずさからの逃避だ。

「ねえ、コーヘー」

俺の予測だと、あと五秒くらいで雨漏りだ。

「コーヘー?」

イチ、ニ、サン、シ……。

「コーヘー!」

「ずわあっ!」

「なにぼけっとしてるのよ」

呆れた声だ。

「いや、雨漏りが……」

「ひどいわね」

「だろう?」

「だろう? じゃないわよ。私が話しかけてるのに無視とか、ひどくない?」

「あ、いや、純粹に気が付かなかったっていうか」

「あーあー、これじゃ勘違いだったのかしらね」

「勘違いって何が?」

「知りたい?」

「そりゃ、ここまで言われたら気になるじゃないか」

「うーん、どうしよっかなあ」

沙月が、クスクスと笑っている。学校で見かけるクールなイメージの沙月と違って、なんというか、ちよっと昔に近いかも知れない。

泣き虫なくせに、好奇心旺盛おうちせいで、無茶な子供だったのだ。

と、少し昔を思い出していた俺に、沙月が口を開いた。

「あのさ、コーヘー」

「うん?」

「ちよっと、昔を思い出して嬉うれしかったのよ」

どうやら、似たようなことをしていたらしい。

「なに笑ってるのよ」

笑ってたらしい。

「いや、俺も今、少し昔を思い出していたからさ。同じだなんて」

「あら、違いわよ」

「違うって、何が?」

「タイミングがよ。私ね、コーヘーがさっき立ち止まった時に、思い出したのよ。ああ、そういえば、昔からコーヘーはよく私を待ってくれたなって」

「……そうだったけ？」

残念ながら、俺はまったく覚えてない。

「そうよ。走り出して、すぐ、止まる。そして私が追いつくのを、いつつも待っていてくれたのよ。もつとも、毎回毎回そうで、だったら最初から全力疾走しなければいいのになって思ってたけど」

「……………馬鹿な子供でごめんさい」

「子供？ 今も変わってなかったじゃない」

その通りだ。くそう、全然成長してないってことか。

「でも、ちよつと嬉しかったのよ？」

「俺が馬鹿でか？」

「それもそうだけど」

ひどい……。

「優しいところも、全然変わってないんだなって」

「え？」

「何よ、驚かないでもいいじゃないの」

「いや、驚いたって言うか、その……あれだ、俺との思い出って嫌なことじゃないのか？」

「どうしてそう思うの？」

「いや、その、だって俺、《悪睡刺魂繫呪》を掛けちゃったし、呪いの力でスカートの中を覗いたし、婚約とか無視したらしいし……うおおおおお、男のクズじゃん俺！」

数え上げて分かる事実。ホントにクソ野郎だな、俺！

リアルに頭を抱えてしまう。

「まー、うん、そこは否定しないかな」

「やっぱりいいいいいいいい」

「でも、楽しい思い出もあったし、それに優しい所が変わってなかったし……ま、いいかなって思い始めてるわ」

それってもしかして、許してくれるってことだろうか。

「丁度、雨も降っているし……昔のこと、水に流してあげるわよ」

「本当か！」

思わず飛び上がるように、俺は沙月へと顔を上げた。

——あ、やばい。

咄嗟に今、自分がしてはいけないことを、してしまっていることが分かった。でも、もう体も心も止まらない。

許してもらえることが嬉しくて、ブレーキが壊れてしまったようだ。

「もちろん、本当よ」

沙月が、微笑む。

雨と湿気で濡れた赤く柔らかそうな唇が、俺の視界でまるでスローモーションのようにゆっくりと開き閉じ、言葉を紡いでいく。

「そうね、代わりと言ってはなんだけど……」

沙月が少し顔を傾げた。濡れた髪の毛から、水滴が零れ落ちて整った曲線を描く頬を伝っていく。

「時々、私の息抜きに、んんっ？」

沙月の唇に、頬を伝った水滴が触れる。

「もうっ……んっ」

赤い舌先をチロリと見せて、沙月が自分の唇を舐めた。

そう、舐めた。

温かそうで、柔らかかそうで、ちよっと濡れてて、そして濡れ光る唇。

ああ、触ってみたい——いや、思ったらダメだってば。

いや、触られてみたい——そうだけど、思ったらダメでしょう。

あの唇を、あちこちに押しつけてもらいたい——あ、それは分かる。

ちよっと舌出るとと最高だよな——舌先で肌をくすぐってもらったり！

心の中で、欲望と自制心ががちりと握手した。なんてダメな自制心なんだろうか、最低だぞ！

「どうしたの、コーヘー？」

「いや、ちよっと——しまったあああああ！」

目と目が逢う瞬間、俺の中で確かにしつかりと《鬼神魂魄刀》が、鎌首をもたげた。それはムクムクと大きくなり、その姿をくつきりとする。

こうなったらもう止まらない。

閃光と共に一直線だ。《鬼刀》が沙月の大事な所に、メリメリとそこを押し広げながら埋まっていく。

「んっ、あっ、ああああっ、なに、入ってっ、ふあんっ、熱いつ、なに、こ、れ……ダメッ、こんなの入らないからあっ」

《鬼刀》に挿入された沙月が、体を仰け反らせて熱く艶めかしい声を上げる。

自分の体を両腕で抱きしめた。

濡れた制服を通して、くつきりとブラジャーの模様が見える。白いブラジャーだ。しかも、水玉模様で谷間にはリボンがあしらってある。

見ている間にも、沙月の中に《鬼刀》がさらに深く挿入されていく。その衝撃に、沙月が震え出す。

「あつ……あああ、奥っ、おきゅうっ、ひんっ、私のい、いちばん深い所お♥ あひっ、あああ、挿ってっ、ああっ、らめえっ、ひやいつてきてるのおおおっ♥♥♥」

限界まで仰け反り、固まり、ガクガクと痙攣しながら沙月が《悪腫》した。そして、糸

が切れたようにゆっくりとその場に倒れ込んでいく。

「さ、沙月、平気か？」

慌てて沙月を抱き起こす。

シャツのボタンとボタンの間から、チラリとおヘソが見える。ちよつと嬉しい。じゃなくて！

「沙月、平気か？ あ、あれだよな、一回掛かって、その後に解けてるんだから、二度目はなかったり、す、するよな？」

すると沙月が、

「う、ううん……」

身じろぎをする。唇から漏れ出る吐息が、なんだかとても熱い。

というか、体全体も火照っている気がする。

「ええと、その沙月？」

もう一度呼ぶと、沙月がうつすらと目を開ける。

潤んだ瞳だ……。

なんだか、凄くやばい気がする。

そつと、沙月を板敷きの床に置き、距離を取る。

「……やだ」

シャツを掴まれました。

「沙月、やだって、念のために聞くけど何がやだなんだ？」

「コーヘーが、私から離れるのが、いや」

とてもストレートな答えだ。

「どうして？」

「だって、私……なんだろう、無性に、コーヘーにくつつきたいの」

「暑い、よな？」

「うん、なんだか、体が凄く火照って……コーヘーを抱きしめたい」

「あの、俺が言ったのは気温が高いつてことで」

「私は、コーヘーのこと考えると、体の芯がジュンッてなって火照ってくるのよ」

きつぱりと、もの凄く危ないことを言い切つて、沙月が立ち上がる。

「あの、なんで立ち上がったんでしょ？」

「コーヘーを逃がさないため」

「逃げなかったら、どうする気だ？」

「押し倒す」

「ちよつと待てええええ、ストレート過ぎんだろ！」

「安心してよ。まずは、コーヘーの色々な所を舐めたいだけだから♡」

フツツと笑いながら、沙月が舌なめずりをする。

やばい、凄く色っぽい。



そして、凄く危険な香り。  
 「落ち着けっ。お、お前だって知ってるんだろ、俺の呪いのことっ。《悪瞳刺魂繫呪》の  
 ことをさ！」

座ったまま後退りしながら、手で沙月を制する。

「もちろん知ってるわ。でも、私がコーヘーを想う気持ちは、《悪瞳刺魂繫呪》に関係な  
 く、本物の。私、断定出来るわ」

「だあああつ、だからそれが呪いの効果だってば！」

「いいえ、私は違うわ」

きっぱりと言い切った。

恐るべし、《悪瞳刺魂繫呪》だ。許してくれたとはいえ、幼い頃にスカートをまくるわ、  
 ぱっぱと捨てる（わざとではないが）わと、男のクズのオンパレードをやった俺を好きに  
 なってしまっている。

ゴンツ。

背中が欄干に当たった。これ以上は、もう下がることが出来ない。

「ちよ、ちよと待て、沙月。冷静に話しあおう」

「いやよ。愛は時にストームでパーニングでスコールなものでしょう？」

「ちよっと何言ってるか分からないんだが」

「嵐のように燃え上がるのよ」

「スコールは？」

「びしょ濡れ」

「女子高生がそーいうこと言っちゃだめだろおおおおお！」

「なんでよ。結果的にビショビショなんだからいいじゃない」

ダメだっ。全く想像してなかったけど、沙月のやつ、本性はスケベエだ。むっつりさん

だったのか……。

「お手」

「あ、はい」

沙月が差し出した手に、ぼんと手を置く。

掴まれた。

って、なんで俺ってば素直に従ってんだよっ！

「フフ、素直なコーヘーも好きよ」

「あ、ありがとうございます。もう満足なんで放してくれませんかね？」

「ダメ」

一言だ。

「だって、コーヘーのぬくもりを味わいたいんだもの」

ギョッと沙月が俺の手を握る。

……ま、まあ色々と言う割にはこの程度か。ちよっと残念だけど、平穩無事に終わ

りそうだ。

沙月が俺の手にほおずりする。

ま、まあ、いいだろう。

沙月が唇を開けた。

ファッ!?

舌が伸び、ゆっくりと俺の人差し指を口に含む。

「ふおおおおおおおおお!」

思わず歓声とも悲鳴ともつかない奇声を上げてしまった。

沙月の口の中で、ねっとり舌が指に絡みついてくる。まるで、このまま指が沙月の中に溶けていく、そんな不思議な感覚だ。

熱い。

そして、甘い。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、何も出来ない。身動き一つ、もう出来ない。

指一本で、沙月に全てが支配されてしまったのだ。

ゆっくりと、ゆっくりと沙月が奥まで啜くわえてくる。

唇が濡れながら、根元までねぶり、しゃぶってくる。

どうしよう。俺はどうすればいいんだ。

このまま——何もかも、全て、沙月に食べられてしまうのだろうか。



「ほうほう、さっそくやっておるのか」  
いきなり俺と沙月だけの世界が、アホっぽい声で斬り裂かれた。  
「クックック、口では色々と言っておったが、やはり女の敵よな」  
土砂降りの雨の中、大人バージョンの玉芽が腕組みをし、ニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。

「ん、大人バージョンが何故か？ ふむ、《悪瞳刺魂繫呪》が発動した気配がしたのでな、走ってきたのじゃよ。ほら、そうするところ、あれじゃ、足の長さに大人な方がじゃな、ヘブシッ」

どうでもいいけどびっしりです。

沙月が言うところの、スコールです。

ぐっしり濡れた衣装が、雨で重くなって時折ずり落ちる。そのたびに玉芽が慌てて引き上げるのだが……。

「……………って、お前、またノーブラかよ！」

一瞬、桜色の突起物がですね。

「ぶらじゃー？ なんじゃ、それは」

そうだった。平安時代で脳みそが止まっている馬鹿だったのだ。

「てか、そもそも傘とかさ……」

「ゆなに貰ったのじゃが、開かぬ」

手に持っていた傘を上下に振る。どうやら開閉スイッチが分からなかったらしい。

「ふおおおっ?!」

沙月が、人差し指について中指を舐め始めた。玉芽の存在など眼中にないのか、ただただ俺をうっとりとして舐めている。

「ふむ。一心不乱じゃな」

縁側までやってきて、玉芽がニヤニヤと沙月を見る。

至近距離になっても沙月は玉芽を無視だ。

「いやいや、妾の姿が見えてないだけじゃ」

「あ、そういや、そうか。普通は見えないんだよな、お前」

「うむ」

玉芽が静かに頷く。

「そうだっ、この状況をどうにかしてくれよ」

「馬鹿を言うでない。妾は、お主がそのまま沙月とやらを喰ってしまい、一生憎まれることを楽しみにしてるのじゃぞ？ 勘違いするでないぞ、妾はお主に取り憑いている妖怪ぞ。どうして力になどなってやるもの」

「カツ」

「む？」

「カツカレー、ゆなに内緒で奢ってやる」

「ふむ。つまりな、この状態はお主の欲情が沙月を行動させておるのじゃ。お主、沙月の唇とか舌に欲情したであろう？」

「あっさり」と玉芽が説明を始めた。昨夜、泣きながらカツカレー喰ってたもんな……。

「つまりじゃ、お主が沙月に欲情するのをやめれば、一時的に沙月もまた落ち着く。お主に惚れているのは変わらぬがな」

「……女子高生に指を舐められながら、俺に興奮するなと？」

「うむ、そうじゃ」

「そんなことが、健全な男子高校生に可能だと想うのか？」

「ま、昔から健全な男子とは、すなわち不健全であるものじゃから、そーと——難しいじゃろうな。クッククック、出来なくてもカツカレーは奢るのじゃぞ？」

ニヤアと玉芽が邪悪な笑みを浮かべる。

こいつ、やけにあっさり教えると思つたが、完全にわざとだ。難しいのが分かつていて、俺に教えたのだ。

いいだろう。カツカレーはカツカレーでも、五十倍くらいの激辛にしてやるっ。

そう決心して、俺は心を落ち着かせる。

明鏡止水の境地になるのだ。

曇らない鏡——。

細波のない水——水といえど——レロリ。ああ、また沙月の舌が指を舐めて、つて、

水からそつちを連想してはいけない。

無だ、無になろう。

何も考えるな。ただ、この自然の全てを受け入れ感じるのだ。

「ぴちゃ。ちゅっ。ちゆる……んっ、ちゅう」

そうぞ、沙月の舌使いがこれまた凄くて。

あああああああ。なんで俺は、そつちに集中してるんだ。

「クッククック、やはり無理なようじゃのお」

笑う玉芽を、俺は思いつき睨んだ。

「な、なんじゃ」

「玉芽さ」

「うむ」

「お前って馬鹿だよな」

「うなっ!？」

「アホだし、抜けてるし、痴女っぽいくせして耳年増なだけの未貫通だし、でも年増だし、落ち着きないし」

「な、なんじゃとおおおとおおお！」

「短気だし、単純だし、やっぱアホだし……」

悪口を言い募る。

そう、とりあえず玉芽の悪口を思い付くだけ並べることにしたのだ。そうとも、性欲と同じく人間の根源的な精神、憎悪に心を染めるのだ！

「バーカ、バーカ、垂れ乳、でか尻、売れ残り！」

「お、おによれつ、よくもおおおつ、ぐ、ぐづ、馬鹿つて言う方が馬鹿なのじゃつ。ええと、この垂れ乳」

「ち、乳なんてないだろ！」

「うぬ、な、ならばええと……バーカバーカ！」

何も思い付かなかったのか、ただのバーカになった。

もっとも俺も、もう面倒になってただ馬鹿を連呼する。

互いに百回以上はバーカバーカと罵りあっただろうか……沙月が、ようやく俺の指から唇を離してくれた。既に右手は全て舐め尽くされ、左も小指が残されているだけだった。

「満足したかな。ねえ、コーヘー」

「は、はい」

「次は、私を……思いつき罵って欲しいな」

熱い熱い眼差しで、俺を見つめてくる。返答はただ一つだ。

「そーいうのは勘弁してくれ！」

欄干に手をかけ、俺は一気に飛び越えて地面に降りた。

「あ、コーヘー！」

「そのええと、悪かったつ。なんとか呪いを解くから、それまでは………欲情しないように頑張る！」

そう言い置くと、ダツシユだ。

いつの間にか、雨は上がって虹が出ていた。



最後まで立ち読みしてくれて  
どうもありがとう！  
続きは本で楽しんでね！